

男であるのがそんなに悪いか！！

rikka

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「……ああ、やっぱりまたこの夢か」

まったく同じ夢の続きを見る少年。もうすでにこの夢を見て3年は経っていた。

夢といってもお気楽な物ではない。どこか中世ヨーロッパを彷彿とさせるリアル——どころがリアルすぎるほどにサイババルな夢の世界。

常に死を身近に感じる世界で生きるため、少年は技術を磨きながら放浪する。

幸い、現実の時間帯で入手できる知識のおかげで、どうにか生きる事は出来ていたが——

その世界には、少年が想像もしなかったとんでもない欠陥があった。

「——なんで男がいないんだクソツタレ!!」

【この小説は『小説家になろう』にて投稿している『なんて夢を見てんだ俺は！』を微妙に改訂しているモノです】

アルファポリスに登録しております

目次

たった一人の『』	1
騎士を夢見る『女』	12
『隻腕』	21
『隻腕』との道中記	30
暗躍する『少女』	37
『邂逅』	46
『』と『猫』	54
『』と『剣士』	67
『コンビ』	77
二人の調査	87
Black meets Red	98
逃走	111

たった一人の『』

——ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……

雪が降り積もった森の中を一人の少年がボロボロになりながら走っている。

少年が身に纏っているのはただのパジャマで、どう考えても山歩きには適さないものだ。

現に、突き出した枝や枯れ草に引つ掛かったのか少年のパジャマは所々破れており、むき出しの肌からは血が滲んでいた。

「くそっ！ いったい、一体どうなってんだ……！」

悪態をつきながら、少年は足を止めない。止めれば、まるでこの雪の中に閉じ込められるような気がするから——

「づあ——っ!!」

だが、少年の体力はすでに限界を超えていた。

一瞬足元がふらついた瞬間木の根に足を取られ、少年は雪に覆われた大地と接吻することになった。

少年はうめき声を上げながらも立ちあがろうとするが、もうそんな体力は残っていないかった。なにせ『この世界』では二日も食べていないのだ。そんな状態で走り回っていれば、体力が限界を迎えるのは無理のない事。今の少年には歩く事はおろか立ちあがる体力も残っていないかった。

かろうじて動く腕で、辺りの雪をかき分けて行く。

——なにか……なにか食べたい……

本来ならば、つい先ほど『向こうの世界』でしっかりと食べていたのだ。

両親と弟の4人でテーブルを囲み、肌寒くなってきたからと母が鍋を用意してくれた。

男が多いからという事で多めに用意してくれた豚肉を、それでも弟と取り合い、母にたしなめられて野菜を器に取っていく。そんな当たり前の光景があったのだ。『向こう側』では。

ノロノロとした速度だが、少年からすれば必死で雪と土をかき分け

る。なんでもいい。なんでもいいから口にしたらかった。

おおよそ二十分ほどそうしていただろうか。徐々に動きが鈍っていく身体に鞭を打ちながらじりじりと這いずり、土を掻き分けていた少年はようやく何かを手にした。

木の感触ではないが、その何かは少し固く、だが微かに弾力がある。

「……ハ、ハ。……バッタもどきかよ畜生」

手にしたのは、子供の頃に弟や学校の友人と競って捕まえていたトノサマバッタによく似た虫だった。

よく似たというのは、その虫が自分の記憶にあるトノサマバッタと少々形状が違うし、今触れているというのに逃げる——飛ぶ気配を全く見せないからだ。

少年は手の甲へと登って来たそれにもう片方の手を必死で伸ばし——掴んだ。

手の中でジタバタ暴れ回っているのだろう、節が手の平をひつきき、ほんのりと痛みを感じるが、少年はそのままゆっくりと手を引き寄せ口元へと運ぶ。

気がつけば涙を流していた。

こんなにも惨めな経験に、虫を食べようとしている嫌悪感に、夢の中でこんなつらい目に遭っている事に、ようやく食べる事が出来る事への喜びに——涙が止まらなかつた。

そして少年は、この世界に来て初めて、生きるために食べた。

これは今から三年前、少年が夢の中の異世界に旅立って二日目の話。

そして、全ての始まりとなる出来事だった。



(ん……もう『ごっち』に来たのか……)

適当な橋の下で野宿した所で『目が覚めた』事を思い出して、少年は毛布代わりに使っていたマントを羽織り直しながら辺りの様子を見ようか。

ゆるやかな流れの川、背の高い雑草に覆われた河原、かなりしつかりとした石造りの橋の支柱。昨晚見た『夢』とまったく変わらない光景。

この三年間毎日ずっと見続けてきた、奇妙なほどにリアルな『夢の世界』だ。

(夢の世界ならばもうちよつとイージーモードな所があっても良い気がするけど……まあ、今さらか)

眠れば違う世界で活動をする事になるという、いわば24時間ノンストップで動いている訳になるのだが——という訳か疲れは感じない。むしろ日を追うごとにどちらの世界でも起きるたびに頭が妙にすつきりしている様な気さえする。

(荷物は……うん、減っている物も増えている物もなし。いつも通りだ)

こちらで眠っている間に枕の代わりに使っていた袋の中にはこの二年の間に入手、あるいは作った道具が詰まっていた。豚肉の燻製や木の実、干した果実等の食糧を始め、ナイフや火打石、ぼろ布に手書きの簡素な地図、インクの小瓶に羽ペンにメモ代わりの白みがかつた葉など……。

そして手元には、一年前からずっと使い続けてきた古いボロ剣と、植物のツタを乾かしてから編んで作った投擲用のスリングが握られている。

(久々に道らしい道に着いたし、これからどうしようか……)

これまで散々山や森の中を走り回ってきた少年。これまではとりあえず人気のありそうで、かつそこまで多くの人間が集まってなさそうな所へ出る事を目標にしていたのだが、いざ達成してしまうと次の

行動に迷ってしまう。

(大きな村だか街を探すか？ 姿隠して今まで通りに喉を壊した事にすればごまかせるだろ。さすがにそろそろどっかに拠点を見つるか作らないと……)

この三年間、少年が放浪の生活を続けていたのには大きく二つの理由があった。

一つは、たまに辿りつく人里は大抵が小さな寒村か、あるいは山賊のアジトだったりという事が多かったという事。

そしてもう一つは――

(……ままならない夢だよな、ホント……)

自分がこの夢の世界で放浪――それも姿を完全に隠しての旅をしている最大の理由を思いだし、なんとなく陰鬱な気分になってため息をつく。

さすがに二年も経てばこの生活にも慣れてくるが、それでも納得のいかない事はある。

まあ、それはさておき――とりあえず歩きださなければ始まらない。

腰に剣を差してからマントを羽織り、詰め直した荷物を背負う。そして橋の下から一步踏み出そうと――

――カアアンツ
!!!!!!

「のおおおおうっ!!?」

踏み出そうとした彼の目の前に、空から細長い何かが二本降ってきた。

思わず後ろへと飛びのき、誰かの攻撃かとスリングに石をセットして構えるが、聞こえてくるのが近づいてくる音ではなく、誰かが走り去っていく足音だけだった。

「ちよ――くそっ！ なんだっつてんだ!？」

橋の下から身体を出して、上に誰がいるのか調べてみる。

顔は見えず、背中しか分からなかったが、そこにいたのは一人の女

だった。身長は自分と同じ160cm中頃くらいだろうか、肩の辺りで揃えられた銀髪が印象的な、小奇麗な女性だった。

咄嗟に大声を出して呼び止めようかとの思ったのだが、少年が迷っている間にその女は近くに止めていた馬の背に飛び乗り、蹄の音だけを残してその場から去って行ってしまった。

「なんだってんだ……」

同じセリフを繰り返しながら、念のために辺りにまだ人がいないか注意してからゆっくりと、先ほど降ってきた細長い何かに手を伸ばす。

砂利で覆われた目の前の地面に、その二本は真っ直ぐに突き立っていた。

「……日本刀？」

少年の住んでいる国でかつて使われていた剣——刀にそれらは酷似していた。

そつと手を伸ばし、その一本を抜いてみる。かなり手入れされているそれは、あまり刃物にこだわらない少年ですら取り込まれそうな妖しい輝きを放っていた。

「……あー、まあ、なんだ」

少年はそのいかにも高そうな——いや、おそらくかなりの値がつくのだろう刃を鞘の中へと戻し、片手で頭を掻きながら女性の去っていった方向をボーっと眺める。

「とりあえずの行動方針、決定ってことで」



西部と中部の境目となるその地域は、旅行を楽しむ貴族や貿易商を相手にするためののしつかりとした宿を持つ村が多く存在している。

一人の女性が立ち寄った村もそんな村の一つだった。

「しかし貴族様も飲みますねえ。もうそれで五杯目ですよ？」

「……飲まずにはいられないのでな」

その宿の一階の酒場で、一人の女がカウンター席に腰をかけて一人麦酒を口にしていた。

肩ほどで無造作に揃えられた美しい銀髪を持ったその女性は、仄かに赤くなった頬にグラスの露で濡れた手を当てて冷やしなからそう呟いた。

（母様はどうして……どうして私の仕官を許してくれないのだ……）

なんとなく腰に手を回し、普段ならばそこにあるはずの相棒がもうない事を思い出して苦笑を浮かべ、またジョッキを煽った。

昔、士官学校に入って最初の休暇の時に、骨とう品店で偶然見つけた逸品だった。

剣身は薄汚れており、鞘はボロボロだったが、妙にその鈍い輝きに惹かれて購入したその二振りの剣は、それから長い時を共にした相棒といつていい業物だ。

いつか自分が学校を卒業し、帝国のいずれかの軍へと士官し、いずれは帝国が誇りとするような騎士へと駆け上がる。そしてその時、自分はこの剣を腰に差しているのだろう。

そう考えていた。

そう信じていたのだ。

「ちやうど夢をあきらめた所なんだ……。過去を振り返ってゆっくりと飲んでいたい気分だな」

そう言つて五杯目のジョッキを空にした女性は、少しふくよかな女将に黙つてそれを差し出す。要するにお代わりだ。

「はいはい、少々お待ち下さいませ。しかし、多いですねえ」

「多い？」

女将の言葉が気になつてそう尋ねると、女将はジョッキを麦酒で満たしてそれを差し出しながら、

「最近、西部に向かう人達が多いんですよ。なんでも特大の儲け話――話というか噂なんですけどね。そういつた噂がいくつかあるから、

一攫千金を夢見て西部へと向かう人が多いんですよ。貴族様もそういった口で？」

「いや、私は……」

何も彼女は金が欲しかったわけではない。ただ、母を——そして騎士への階段を昇りはじめた優秀な妹を見返したくて、手柄になるような話を探して放浪の旅を続けていただけだったのだ。

とはいえ、他のものと同じように金を稼ぎながら放浪しているという点では何も変わりはない。

「……そうだな、私も似たような口か。ただ、西部の話は聞いたことなかったな。是非教えてくれないか？」

加えて、結局叶わない夢を追いかけようとしているという点もきつと同じなのだろう。

そう考えた彼女は、とりあえず話を聞くことにした。

「といっても、よくある与太話ですよ？　どこそこの洞窟に龍が出ただの、まだ探索の手が入っていない遺跡があったのだ。まあ、一番ありそうなのは西部が最近穏やかじゃなくなってきたって噂かしらねえ。実際、この街にも傭兵さんがたくさん来ているし……西部中央の街なんて、もうかなりの傭兵が行ってるんじゃないかしら？」

「それはまた……まずいだろう」

傭兵が集まるといえるのはそれだけで治安が悪くなる。

ただでさえ傭兵という者は半ばゴロツキのような者が多い。さらに傭兵という職業上、それが集まる場所は戦場になる可能性が高い……という印象は根づいてしまう。たとえばセネタで集まったとしても、それが火種になるといえる事もあるのだ。

(そのような状況になっているのなら……ひよっとして……)

本当にくすぶっていた火種に火がつく可能性があるのではないか。

西部という場所は、かつての帝国統一戦争で多くの原住民や半ば奴隷として使われた旧開拓民達と幾度ももの衝突を繰り返している場所だ。その可能性は十分にある。

(……行く価値はあるか?)

夢をあきらめ、違う道を模索するために彼女は長年愛用していた剣

を捨てた。

だが、まだ自分の中にくすぶっている物が残っている事にも気がついていていた。

気がつけば、手持ちの金で来る途中にチラツと見えた武器店でどのような剣を買おうか考えている自分がいる。

もし、本当に西部で何かが起こるのならば――

「一番新しい噂ではどのような話があるんだ？ やはり与太話に近いものか？」

これが多分、自分にとっての最後のチャンスだろう。

そして行くと決めた以上、少しでも情報が欲しい。

彼女の質問に女将は少し眉をひそめて、

「そうですねえ、新しい話だと……。確かに与太話なんですけど……」

「？ どうした、歯切れが悪いじゃないか」

女将は困った様に耳の裏を指で軽く搔きながら、苦笑を浮かべ、

「いえ、噂の元になったのが私の知り合いの子でして……」

「ほう……。ああ、続けてくれ」

女将に続きを促すと、彼女は苦笑をより強くして、言いにくそうに口を開いた。

「半年ほど前ですかねえ……。猟に出かけていたその子が血相を変えて村に戻ってきまして、大きな声で叫んでいたんですよ。その――」
ひよっとしたらその知り合いの子というのと思った以上に付き合いがあり、信じてあげたいのかもしれない。

女将は、キヨロキヨロと女以外誰もいない事を確認すると、そつと顔を近づけて声を潜めた。

「――『男だ！ 男が森にいた!!』って……」

その言葉を聞いて、ポテトのフライを摘もうとしていた手を思わずピタツと止めてしまった。

「……男？」

「ええ、男らしいです」

「……なんだそれは……？」

確かに、先ほど聞いた与太話に匹敵する話だ。

なぜなら――

「男など、遠い昔に滅んだ種族じゃないか」



とりあえずの行動目標として、刀を落としたと思われるあの女性の後を追うことに決めた。

抜いただけでも分かるほどかなり念入りに手入れされているし、刀はもちろんこの鞘も高そうだ。

このままどこかに持って行って一本売り払って金にするという手段も考えたのだが、元々の真面目な性格も手伝い、一応返す努力をしようという考えに至ったのだ。

――ただ単に黒い衣を頭から被っている怪しい人物に買い取りを行ってくれる店があるのかどうか不安になっただけというのもあったが……。

とにかく、少年が少女の後を追いついてから一日――少年の感覚では二日が経過していた。

さすがにもう蹄の跡は残っていなかったが、今の所まだ街道は一本道だ。

少なくとも森と違って迷う危険性はないと、気楽に歩いていた少年だったが――

「なんだこいつ、奇妙な格好しやがって……金目になりそうなものは剣しかねーじゃねーか」

「見せられねエ顔か？ くそ、娼館に売れねーじゃねーか！ 見世物小屋にでも売り飛ばすか？」

「ああ？ 見世物小屋に人なんざ売れるか。奴隷市の方がまだいいぜ」

(気楽に考えすぎてたよ、クソツタレ……！)

ガラの悪いチンピラの様な連中に囲まれて、余りに気楽過ぎたかと後悔していた。

(久々に森とか山の中じゃないしっかりした所を歩いてたから完全に安心しきってた。どこだろうと俺にとつての安全地帯なんてありやしないのに……。それにしても——)

改めて自分を取り囲んでいる盗賊崩れを観察する。人数は6人。それぞれがあまり手入れされていない剣やら槍を手にこちらを取り囲んでいる。そしてその全員が——

(女、女、女、女……そしてやつぱり女。ちくしょう、こういう時は無精ひげ生やしたガラの悪い男っていうのが相場だろうが……！)

その全員が女だった。金髪や薄い茶髪。白人系の顔立ちの女6人が、たった一人の男を取り囲んでいる構図だ。——この世界で、恐らくはたった一人の男を。

「おい、そこの！ 大人しくその剣だけ投げてよこしな！ そうすりや命と身体は助けてやってもいいぞ。どうせ売りモンになりそうな身体じゃねえんだろ？ 見逃してやるからさっさと——」

頭領らしい剣を持った女が何か言ってくるが聞く価値はない。

黒い衣の下で、外から見えないように用意していたスリングを素早く取り出し、拳よりも少しばかり小さな石を投擲した。

数回回転させたスリングによって加速した石は、違うことなく綺麗に女の額へと命中する。

結果——女は言葉を発する暇もなく、どうっ！ と後ろへと倒れ込んだ。

「な……え……う？」

「か、頭……う？」

恐らく、何が起こったのかわかっていないのだろう。

ただざわめくだけの女達を尻目に、少年は二本の刀を荷物と一緒にその場に捨てるように置き、今まで使ってきたボロ剣を鞘ごと腰から引き抜いた。

「ハーレム願望なんて俺にはねーってのに……」

さすがにこちらが剣を手にしたので、向こうも戦闘態勢に入る。とはいえ、少年の眼から見てそれはまばらで粗雑で——ようするに戦闘に慣れている様には見えなかった。

「なんて夢みてんだよ、俺はっ……！」

思わず漏れた少年の呟き。向こうに聞こえた訳ではないだろうが、まるでそれを合図にしたように女達がそれぞれの得物を構え、雄たけびを上げながら少年に向かって駆けだしてくる。

そして、この世界唯一の男は今度こそ鞘から剣を抜き放つ。

丈夫な乾木から作られた鞘の中を滑り、外気へと触れた古い剣の刃。

磨き上げられたその刃は鏡のように、黒いフードに隠された少年——シノブの不機嫌そうな口元を薄らと映し出していた。

騎士を夢見る『女』

「まったく、我ながら馬鹿げている」

一度剣を捨てた身でありながら、安い剣を再び腰に差した少女は、西へと向かうために街道を馬に乗って進んでいた。西部中央の街『アイエナ』への最短距離となる道だ。

(男、か……)

おとぎ話の題材となる龍や悪魔と違い、男は魔道士同様、確かにいたと多くの文献に残っている種族だ。いや、種族というのは違うかもしれない。そもそも男というのは、自分達『女』の番いであるべき存在だったのだから。

残念ながらどうして男達が姿を消したのかは分かっておらず、多くの歴史学者が未だに議論を交わし、男がいたと思われる遺跡や遺物が出土するたびに国を越えた大規模調査団を編成し、徹底的に調べつくしている。

本来ならば他の獣がそうであるように、メスに分類される女と、オスに分類される男がいるはずだった。オスがいなくては子を成す事も、後世に種を残す事も出来ない。

だが、なぜこうして女だけで人という種が存続出来ているのか。それは、世界中に散らばっている遺跡——クロイツ・ポイント——クロイツと呼ばれている魔道士達が遺した奇妙な施設のおかげである。

本来ならば男がいなければ作れない子供も、クロイツを子供を作る相手——パートナーと共に利用すれば、どちらか——あるいはどちらも子供を授かる事が出来る。

余談だが、このような施設を作る必要があった事から、おそらく男は何らかの形で死滅する事が当時の人達、あるいはそれより前に途絶えた魔道士達は知っていたのではないだろうかというのが、最近の歴史学者の定説である。

ともあれ、ほとんどの国はどこかの大きなクロイツを中心に発展しており、集落等も、領地内のいずれかのクロイツを囲むように作られ

ている。

だが、全てのクロイツが正常に稼働するわけではない。異常な子供が産まれてきたり、活動そのものを停止してしまう事は決して珍しくない。

現に彼女の妹は産まれた時から左腕が無く、一時期そのクロイツは使用できないとされてパニックに陥ったらしい。

学者や祭事に携わる人間が男について徹底的に調べているのは、誰よりも自分達の種が途絶えてしまう可能性について深く考えているからだろう。

彼女も士官学校にいた頃に教官から聞いた事があったが、年々人口も使えるクロイツも減少しているらしい。

まだこの帝国が広大な領地と多くのクロイツを所有しているために混乱は起きていないが、周辺国はこの帝国を狙っているし、同時に隙あらば隣国に攻め入ろうとしている。

（もし、本当に男がいるとすれば……。そして帝都にまで連れて行けば……）

手柄どころの話ではない。間違いなく偉業として称えられるだろう。なにせ、種の存続の危機を救った事になるのだから。

「……なんとも都合のいい話、か」

そんなものはあくまでも夢物語。もしそのような話があるとすれば、大衆図書館の中に転がっている陳腐な騎士物語くらいだろう。

だが。

それでも。

それでも、だ。

やはり騎士になることを諦めきれない彼女には、それを笑い飛ばすことなど出来はしなかった。

（どうせ行く当てのなかった所なんだ。無駄足を踏むのも悪くないだろう）

未だに慣れない新しい剣を腰に差し直し、騎士を目指すその女は、馬に揺られながら真っ直ぐと西の方角に目をやった。



西部中心の都市、デイエナ。

かつては政争に敗れた没落貴族が送り込まれる陸の孤島と呼ばれていたこの西部を、僅かな数の部下と共に帝国有数の都市へと押し上げた現領主『リディアⅡハウゼン』は、公邸の会議室で、信頼に値する二人の部下と共に状況を整理していた。

その一人として選ばれた、新人と言っていい文官——キュベレは、なぜ自分が呼ばれたのかを疑問に思いながら、会議の内容を片っぱしから頭に叩き込んでいた。

「では、やはり『男』は見つかりませんか？」

「はっ。このデイエナから逃走した後の足取りを追った所、どうやらすぐに大森林へと入ったようです。見たことない服装の者が大森林へと入るのを近隣の農民が多数目撃しております。その内の一人は実際に会って、いらなくなつた古道具などを渡したと。幸か不幸か、目も耳もかなり不自由な老婆でしたので『男』とは気がつかかなかつたようです」

綺麗な赤毛を後ろで束ねた騎士が、リディアの問いにハッキリとした口調でそう答える。

「なんてこと……。よりによって大森林に……」

ここ西部中央から東側に伸びる大森林は、一度迷い込めば出られない迷いの森として有名な所だ。

元々ここに住む原住民ですら恐れており、帝国は逆にそれを天然の妨害壁として利用したのがかつての統一戦争時代に城塞都市として築かれたデイエナだった。

「現在、あくまで信用のおける者達でのみで大森林外周部を搜索させております。もし抜け出せているのならなんらかの情報が入るか」と

……。付け加えるならば、『男』は大森林外周部にて部下が発見しています。もしかしたらの話ではありますが、ある程度の土地勘があるのかもしれない」

「ありがとう。情報統制の方はどうなつて？」

これは自分の担当だと、キュベレは要点をまとめておいた羊皮紙を手に報告を始める。

『二年前の騒動』に関しては緘口令を発していますが、急な事でしたので完璧とは言えません。もっとも、内容が内容なだけに、このまま噂レベルの話を広げさせ、与太話だと思わせておくのがよろしいかと思えます」

「……ごめんなさいね。私が慌てて『男』を確保しようとしたために厄介事を増やしてしまつて」

「いえ、誰にも予想できる事ではなかつたでしょう。私はその場にはいませんでしたが、他の者達の話からその人間が『男』であることは間違いないでしょう。文字通り『生きた伝説』を目の前にすれば、冷静な判断は出来なくなるもの。それが国どころか、世界を動かす存在となれば尚更です」

事の発端は、二年前。先ほど発言した赤毛の騎士——ベルヌーイの部下が、『大森林外周部にて倒れていた、奇妙な人間を発見した』という興奮しながらの報告から始まつた。

それだけならばたいした話ではなかつた。大森林は、その広大さと謎が相まって、トレジャーハンター気どりの愚者がよくよく侵入を試みている。

その大半は外周部で、レンジャー部隊の人間に取り押さえられているが、ごく稀に取り逃がしてしまい、内部へと入ってしまう者がいる。話を聞いた時点では、運よく森から抜け出せた者が倒れていたのかと思つたが、その後続く報告で、ベルヌーイは一瞬、部下が寝ぼけているのか真剣に疑う事になつた。

『その者、男かもしれません』

ベルヌーイは、反射的に部下を殴り倒してから一から報告させ直した。

倒れていたその人物は、この地を知るものならばありえない程の軽装で倒れていたらしい。とつさに体温を調べた所、当たり前だがかなり下がっていたために、慌てて詰所へと運び暖を取らせ、かなり泥で汚れている服を着替えさせようと剥ぎ取ろうとした時。

自分達女にはないモノがあつた——らしい。

部下が混乱状態に陥っている所に、その者が目を覚まし、慌てた部下は『男』をリディアに見せるために、彼女の屋敷へと連行したのだが——

「仕方のない事で済む問題はありません。そもそも『男』も私達と同じ人間だと言う事を失念していました。それなのに公衆の面前で……」

リディアは自分が二年前に何を命じたのか思い出し、頭痛を堪える様に頭を押さえた。

（確か、報告によると取り押さえて脱がせようとしたとか……そりゃあ男じゃなくても逃げようとするわねえ……）

リディアの様子から、おそらくその時の事を思い出しているのだろうとキュベレは推察した。

「あの時、もつと落ちついて対処すれば、あるいは彼の者も大人しくしていてくれたのかもしれないのに——」

話を公に出来ない事もあって、あまり大勢を動かさず、結果調査は難航してしまっていた。

「今は、過去を論ずる時ではないでしょう。もつと差し迫った問題もあります」

「……キュベレ」

頭が良いだけ過去の失敗に引きずられやすい上司のために、キュベレは羊皮紙の一部——赤の塗料で丸く囲った項目を指でなぞりながら、仕事の話へと切り替える。

「男の一件にも一部関係ありますが、旧開拓民と帝国から移住してきた国民の間で衝突が多数発生しています。今の所は警備隊だけで解決できていますが、徐々に規模が大きくなっています。かといって、軍を動かせば……」

開拓民はかつての身分制度で奴隷とされていた者達。強制労働で

この土地を作らされ、その後口減らしのために帝国軍に体の弱い者達から殺されていた。

「帝国から預かっている軍もそうですが、自治軍を動かしても刺激することになるでしょう。ただですらここ最近、妙に旧開拓民が過激な行動に出る事が多い。下手すれば大規模な暴動が起きる可能性だつて……」

ベルヌーイが後を続けた言葉に、キュベレは頷いて肯定する。

本来ならば軍を総動員してでも『男』の搜索・確保に当たりたいのだが、最低限の人員しか動かせないのはここにある。

「最悪、旧開拓民および原住民の人間が、ここ西部の自治権奪還を名目に反乱を起こす可能性も十分にあります」

「……………気に食わないわね」

リディアは、共に西部を作り上げていった者達の中でも、特にこの地を愛していた。

かつて奴隷扱いされていた開拓民たちとの和解、可能な限りの住民救助、救援、生活基盤の底上げ。それらを通して、自分を支えて来てくれた部下達、自分に着いてきてくれた帝国民、そして過去の事を水に流し自分を信じると宣言してくれた旧開拓民・先住民族の一団。そのどれもが我が子の様に愛おしかった。だから――

「恐らく、この騒動そのものが作られたものでしょう。どれほど法を徹底し、善政を行おうと街にそぐわない者は消えませんが。そういった者達の集まりを抑えて――」

「ええ、分かっているわ」

リディアは静かに――だが激しく怒っていた。激怒と言っている。静かにこの地へと伸ばされた謀略の手に気がつかなかった自分に、今傷つく民を眺めるしかない自分に、

そして、この地にふざけた真似をしてくれた愚か者に。

「リディアハハウゼンの名の元に、自治軍を三つに分散させます。ベルヌーイ、内一つは貴方の隊よ。よろしく頼むわ」

「はっ」

ベルヌーイは胸に手を当て、頭を下げる。彼女こそ、リディアハ

ウゼン自慢の剣。西部自治軍最強と言われる將軍である。

「もう一つはリディア様率いる本隊。では残る一つは？」

キュベレは僅かに首をかしげてそう尋ねる。

少なくとも自分ではないだろう。自分に軍を率いる様な才能はない。そう考え、尋ねた所。

「リアフィード家が、あの『隻腕』を貸してくれるそうよ。すでにこちらの方に向かっていているらしいわ」

「……なんですって？」

その二つ名は、少し前から帝国に広がっているものだ。『隻腕』。その通りクロイツの不備か、あるいは誤作動により、片腕を失くして名家の元に産まれてきた女性。

長女ではなく次女だったという事もあったため、一時はサロンで話題になったが、すぐに忘れ去られていくだろうと誰もが思っていた。

ゆえに、誰もが予想しえなかっただろう。彼女の剣が、見る者を惹きこむ様な美しさを持つ事になるなどと。

たった一本しかない腕から繰り出される技の美しさから、かつて彼女を乏しめるために使われていた蔑称は、気がつけば彼女を褒めたたえる二つ名へと変化していた。

——『隻腕』のスレイ。

今はまだ、ほとんどの貴族からせいぜいが期待の新人程度の扱いかされていらないが、見るものからは間違いなく帝国の将来を担う人材だと評価されている人物だ。

「いくらなんでも対応が早すぎないでしょうか？」

「そうね。でも、リアフィード家の情報網なら何かを掴んでいたとしてもおかしくないわ」

リディアが言う通り、リアフィード家は名家の中の名家と言えるだろう。名だたる騎士を何人も世に送り出してきた騎士の家系。ゆえに歴代帝王からの信頼も厚く、軍事の中枢は彼の家にあると言っても過言ではない。

確かに、信頼できる情報網を持っていてもおかしくはなかった。

「あなたの友人の妹でもあったわね。キュベレ」

「……単なる腐れ縁のようなものです」

そう、『隻腕』はリアフィード家の次女。家を継ぐハズの長女は他に
いる。

もつとも、現リアフィード家の当主が妙に『隻腕』に固執している
ために、実は廃嫡されたのではないかと噂になっている上に、現在行
方不明なのだが……。

「腐れ縁こそ素晴らしい繋がりだと私は思うわ。あの細身で片刃の剣
を使ってた娘……名前をなんと叫びたかしら」

リディアは一度、士官学校で開催される御前試合でリアフィード家
の長女を見た事があった。

その時彼女は既にベルヌーイという騎士を手に使っていたために、武
に優れた者より文官としての才能があるものを必要として数ある生
徒の中からキュベレを見出し、自分の部下として採用した。

同時にあの時の少女の剣も、確かにリディアの眼を引いたのだ。引
いたのだが――

「テレゼです、リディア様」

「ああ、そうだったわ！ テレゼ、テレゼリアフィード！」

思い出せた事が嬉しかったのか、手を叩いて喜ぶリディアを、ベル
ヌーイは僅かに口元を緩めて見守り、キュベレは久々に聞いた友人の
名前にため息をついた。

（つたく、あの剣術馬鹿はいつたどこをほつつき歩いているのやら
……）

士官学校の訓練の際、肩ほどで適当に整えたアッシュブロンドの髪
をなびかせ、いつだつて自信満々に奇妙な剣を振り回して最前線を走
り回っていた友人を思い出し、懐かしさを感じる。卒業式典の数日
後、いきなり姿をくらませたが……。

（それにしても、隻腕が来るか。余りのタイミングの良さに反吐が出
そうだけど……）

事が大事になるかならないかの絶妙な時期に、実力のある将来有望
な士官候補を送り込んでくる。

目的は色々と想像できるが――

(単純な売名、政治的な繋がりを求めて、……可能性としては低いけど、男の噂を聞きつけて)

ともあれ、厄介事になりそうだ。キュベレはここ連日の書類仕事で疲れた頭をなんとか働かせ、細部について話し合っているリディア達の会話をそこにしつかりと刻み込んでいた。

(ああ、忙しくなりそうね……)

二人に聞こえないように、そっとキュベレはもう一度ため息をついた。

『隻腕』

『銀の髪の……ああ。その貴族様ならばもう西のデイエナに向けて出発したよ?』

盗賊くずれを打ちのめしてそこらの木に逆さ吊りにしてから三日ほど経ち、ようやくシノブは一つの街へと辿りついていった。

あの時見えた女性の服装がすっかりしていたために、もし泊まるとしたらそれなりに立派な宿ではないか。そう考えて色々当たってみた所、三軒目にして辿りついた回答はシノブを気落ちさせるには十分な情報だった。

もういつその事、この街で刀を売り飛ばして路銀の足しにしようかとも思った事もある。

だが、頭から黒い布を羽織り、低い声をあまり聞かせたくないために出来るだけしゃべらないようにしている自分を信用させるために、銀髪の貴族を追っている理由を女将には伝えてしまっている。

もしここで刀が市場に出回っているのを見つかれば、自分は貴族の持ち物売り飛ばした人間として特定されるだろう。この世界の社会はよくわからないが、古今東西『貴族』という存在には盾つかない方が身のためというのは『お約束』である。

探せばこっさり流してくれる闇市の様な所もあるかもしれないが、そういった方向のリスクは出来るだけ避けたい。

色々と考えた結果、女将がいた小さな街から出発して街道沿いに歩き続けて五日が立った。目的地は西。デイエナという城下町である。

(「デイエナ……多分、あの街だよなあ……」)

青みがかった長い髪が印象的だった、大人しそうな大人の女性。この世界で初めて出会った女性兵士にあれよあれよと言う間に連れて行かれた先で出会った——正直、シノブの好みにぴったり当てはまる女性の顔を思い浮かべる。

(「とはいえ、いい思い出じゃあなかったか……」)

その時点で、この夢を見始めて一年近くが経っていたのだ。しかもその全てが森の中を彷徨い、その日その日をどうにかこうにか生きて

いくのに必死だった。

そんな中で始めて人と出会い、そのまま紹介された人物が自分好みの美女。不覚にもシノブはその時、

(やっとな……やっとな夢らしい夢になった……っ！)

と、内心で歓喜していたのだ。ひよっとなしたらこの時、すでに泣いていたのかもしれない。

まずは自分の事から話そうとしたシノブの言葉に被せるように、ハウゼン卿と呼ばれていたその女性はそれまで閉じていた口を開き、周囲に控えていた兵士に一つの命令を下した。

『その者の衣類を脱がせなさい』

『すみません。来る所間違えました、失礼いたします』

咄嗟に踵を返し、逃げ出そうとしたシノブを誰が責められるだろう。

必死に泣きながら駆け抜け、好みの美女にそんな命令をされる夢を見ている自分の趣味について小一時間考えてみたくなった彼を、一体誰が責められるだろう。

『逃してはなりません！ 衛兵を……ベルヌーイっ!! あの者を――』

『男』を捕まえて!!』

女性の叫び声が聞こえる度にワラワラと沸いてくる武装した女達をかいくぐり脱出することが出来たのは、まさしく奇跡といえる。

赤毛を後ろで束ねた、立派な槍を構えた女が立ち塞がって『大人しくしろ。さもなければ――』とか言われた時は、夢の中とはいえそれこそ死を覚悟したものだ。

結局、幸運に幸運が重なりどうにかこうにか逃げ切れたのだが、これが切欠で夢の世界での自分の立場を理解したシノブは放浪の旅へと入ることになる。

まあ、その前に妙に深い森の中を一年近く彷徨う事になったのだがそれは割愛。

(この世界に来てからおおよそ三年。最初のサバイバルで一年。逃亡生活に入ってからまた一年。旅と言えるのは一年だけか。せつかくだからこの世界を周ろうとは思ってたけど……)

結局出た答えが、西部に入る関所ギリギリの所まで行って、会えなかったら違う街へと向かうという事だった。

(男だとバレれば追いかけまわされるし、姿を隠せば人から怪しまれて生活が思うようにいかない……ホントにこの夢ときたら……)

つくづく『夢』が無い夢だと、シノブはため息を吐く。この夢の中で自分が満たされていると感じた事がほとんどない様な気がしてき

た。
可愛い女の子が薄着——あるいは裸に近い無防備な姿でいる事が多く、そういつた光景を見るとドキドキするが、それを押さえなければいけないとなるとストレスは募るばかり。

逆に、かわいい女の子が人懐っこそうな笑顔を浮かべて近づいてきたら強盗だったり追剥だったり殺人鬼だったりするのだ。

(なんてままならない夢だ……)

ふと、街道から左に広がる草原へと目を向ける。

特に獣の気配もなく、身を隠す場所もないので盗賊も恐らくいないだろう。そもそも、おかみの話ではこちら辺はそれほど危険な所ではないらしい。

少し離れた所に、その草原をくり抜いたように大きな湖が広がっているのが見える。川も見える事から、多分魚もいるだろう。

「……絶景と魚をつまみに一杯やるかな」

この夢の世界で、唯一シノブが良かったと思う事。それは、現実世界での年齢制限を一切気にせず、飲酒が楽しめる事だった。

新品のザックから小さなスキットボトル——中身は女将から勧められたラム酒だ——を取り出したシノブは、今までのよりも軽い足取りで街道をはずれ、湖へと足を向けた。



何事も、慣れてしまえばそれまで苦痛だった事もそうでなくなるもののだ。

その片腕の少女は、今まで苦手だった乗馬の腕前がそれなりになっている事に少し安堵しながら、街道を西に向けてまっすぐ進んでいた。

（盗賊の気配も、人を襲う様な獣の気配もない。文献の多くでは西部といえば魔境の代名詞でしたが……ハウゼン卿。やはり優秀な方の様ですね）

士官学校に置かれていた文献でしか読んだ事がなかったが、一昔前までは街道も繋がっておらず、当時西部で働かされていた開拓民と先住民を隔離するためだけの場所という認識が強かったらしい。

それが今では成長し、帝国有数の領地へと発展した。彼女が『知の女傑』と呼ばれるのもよく分かる。

だが、見方を変えればそれはすなわち、今の西部には欲望を呼び寄せる魅力的な『エサ』が大量にある事を指し示している。

（母様は、私にハウゼン卿とのつながりを作る事を求めているのでしょうか……）

最近の母の動きがよく分からない。彼女は真面目に最近、そう感じていた。

あれだけ可愛がっていた姉を冷遇したのもそうだ。ついには姉に子供を作れと命じたらしいが……そもそも、一体どんな女性を、あの姉に宛がうつもりだったのだろうか？

「姉上……」

親しみを込めて『レーゼ姉さん』と呼ぶと、『騎士らしくない』と叱りはするが、それでも嬉しそうに頬を緩めていた姉の顔を思い浮かべると。

今、あの人は一体どこにいるのだろうか。

懐かしさから来る寂しさを振り払う様にゆっくりと深く息を吐き、そしてまたゆっくり吸う。新鮮な空気をゆっくりと味わうのが、彼女の気分転換の方法だ。

何度かそれを繰り返していると、ふと、吹いてきた風の中に、ほのかな煙の香りが混じっている事に気がついた。

「あら……？」

風の吹いてきた方に目を向けると、湖のほとりに誰かが立っているのが目に入った。

その少し離れた所では黒い煙が立ち上っている。何者かが、そこに落ちている枝などを燃やして焚き木をしているのだろう。

（こんな所でキャンプを？　もう少し行けば宿もあるのに……道を知らない者か？）

遠目で見ると、何をしているのか分かりづらい。おまけにコートか何かを羽織っているのか、全身真っ黒で、動いていなかったら小さな木か何かだろうと見落とすほどだった。

少し気になった彼女は、声をかけて見ようと馬をそちらに寄せて見ることにした。

幸い、湖のほとりまで馬ならばそんなに掛からなかった。近づけば近づくほどにその人物の姿はハッキリと見えてくるが……。

「……………ど、どこかの街で流行っているのかしら？」

怪しい。

怪しすぎる。

文字通り頭のとっぺんからつま先まで真っ黒な布を纏っていて、後ろからでは肌がまったく見えない。

仮にどこかの街でこれが流行の服だと言うのなら、任務でもない限りその街を訪れる事は遠慮したい。

どうやらほとりに腰をかけて、夕日に染まってく湖を肴に酒を嗜んでいるようだ。わずかにだが、安物のスキットボトルを持っているのが見えた。

たしかに絵になる光景だが、メインとも言わべき人物があらさまな不審者では、ある種の緊迫感にみちあふれた構図となる。

これほどまでに見事な不審者を、まだ騎士として経験の浅い彼女は見た事が無かった。

さすがにこれは声をかけて、どのような人物か確かめないとまずいだろう。

そう判断した彼女は、馬から降りてそっと近づいた。少しほろ酔い気分なのか、鼻歌が聞こえてくる。

帝都ではもちろん、途中立ち寄った街や村でも聞いた事のない歌だ。

「その者、少し尋ねたいのだが……」

時折、石を積み上げて作った簡単なかまどの上で燻している魚の方をチラチラ見ながら鼻歌を続けているその人物に近づく。すると、それまで生い茂った草に隠されていた荷物が目に入る。

旅人にしては危なっかしい、粗末な装備だ。恐らくは手入れでもしていたのだろうか、鞆から出して並べられている道具や装備のほとんどはかなり摩耗していた。それらが入っていたのだろうか鞆は、汚れ具合から恐らく新品なのだろう。唯一まともな装備といえればそれくらいで、後は今まさに手入れの最中なのだろう手に持った剣くらいか。黒づくめの身体に隠れてハッキリと見えないが、時折わずかに覗かせる刃は中々に立派な渋い輝きを見せた。

(しかし、どこかで見た覚えが……)

そして、ふと感じたその懐かしさは正しかった。

彼女の声に反応して鼻歌と手入れの手を止め、その人物は手入れしていた剣を布でまきながら鞆の上に置こうとし――

「――っ！ 貴様、その剣はっ!!」

気がつけば彼女はレイピアを抜き、首元に突きつけようとしていた。

士官学校ではその鋭さと早さから『飛燕』と呼ばれていたその刃は、独特のヒウンっ！ という鋭いを音を発し――

――カアンっ!!

「!?」

そして手にした鞘で、手加減したとはいえ、ある意味で絶対の一撃が弾かれた。

目の前の怪しい人物は、手放した剣ではなく傍らに置いていた鞘を

使い、模擬戦や御前試合でほとんどの相手を一撃で仕留めてきた刃に見事に反応して見せた。

「……………」

その人物は何も言わずに腰を上げ、ただじつとこちらを覗っている。

正直不気味だった。顔が良く見えないほど深いフードを被ってただじつとこつちを向いている得体のしれない——だが恐らくはそれなりの腕を持つ剣士に、未知から来る恐怖を覚える。

何とか言ったらどうなんだと問いたいが、それよりも彼女には聞かなければならぬ事があった。

彼女は抑えきれない興奮と、一抹の不安を胸に叫ぶ。

「答えろ！ その剣をどこで手に入れた！」

叫ばずにはいられなかった。彼女が尊敬し、敬愛する姉——テレゼリアフィードが、どれだけ変わり者とからかわれても決して手放さなかった二振りの剣を、目の前の不審者が手にしているのだから。



(馬で近づいているのに気付かなかったとか……。やっぱり、夢の中とはいえまだまだ明るいうちから酒を飲んでるのは不味かったか？

ああ、ますます夢のない……)

結構どうでもいい事をぼんやりと考えながら、シノブは鞘を握る手を緩め、目の前の女性に対応できるようにほろ酔い気分の頭を『しゃきつ』と働かせて気持ちを入れ替える。

事故か何かで失くしたのだろうか、片方しかない腕で細身のレイピアを構えている少女。

その姿は凜としており、この夢の中で出会った女性達の中でも確實

に上位に入る可憐さだった。こんな状況でなければシノブはフードの中で顔を緩めていたに違いない。

（つていうか強い。勝てねえ。何度も受けてたらそのうちブスリっ！か……）

シノブとて、この世界で幾度ももの修羅場をくぐり抜けてきた旅人である。

寝泊まりするためにお邪魔した森の中のボロ家が盗賊団のアジトだったり、雨宿りに入り込んだ洞窟がトラップ満載の遺跡だったり、馬鹿デカイ犬とも馬ともつかない生き物の大軍に襲われたり……。

およそ二年ばかりの経験とはいえ内容は濃く、盗賊相手ならその大体を撃退出来るほどには腕を上げている。

おかげで、ようやくこの夢の中限定で少しは腕っ節に自信が持てるようになった所なのだが……

だからこそというべきか、あるいは幸いにもと言うべきか——目の前の少女と自分の間には恐ろしい程の実力差がある事がシノブには理解出来た。

（さて……どうする？）

とりあえず、このおっかない女の子が刀に興味を持っている事は確かかなようだ。かといって追剥や盗賊ではない。そういうならず者にしては身なりが立派だったし、先ほど弾いたレイピアもかなりしつかりとしたものだった。

一瞬この子が落とし主かとも思ったが、あの時後ろ姿を見た女はアッシュブロンドのボブカット風だった。確かにこの子の髪の色は似ているが少々色合いが違う気がするし、何より髪を伸ばしている。

ひよっとしたらあの時は髪を束ねていたのだろうか？ あるいはあの時の子が実は泥棒で、本当の持ち主はこの子だった？

（まあ、悩んだ所でどうせこの娘相手に何か行動がとれるとは思えないし……）

実力差は圧倒的。だが様子を見る限り血を好む様な感じではないし、一度落ちつけば話も通じそうだ。

シノブは、手に持っていた鞘をぐるりと回して刀でいう切っ先側の

方に握り変えた。

攻撃されると思ったのだろうか。レイピアをより高い位置に構え、いつでも突きが放てるようにしている彼女に向けて——シノブはゆっくりと、手にした鞘を差し出した。

(降参した方が得……か)

差し出された鞘を、鳩が豆鉄砲を食らったような顔で凝視している少女の顔を観察しながら、シノブはひっそりとそんなことを考えていた。

『隻腕』との道中記

「まったく！ あんた今までどこほつつき歩いてたのよ!! 教官も私もほんつつつとうに心配したんだからねっ!!? わかってんの!!?」

偶然再会した友人の懐かしい罵声に、つつい頬を緩めそうになるのを堪えて剣士——テレーゼは、数少ない友人の叱責をしっかりと受け止める。

「すまない、キュベレ。思う所があつてな……」

とくにトラブルらしいトラブルもなくディエナへと到着したテレーゼはまさかここで知り合いに会うとは思っておらず、久しぶりに高揚した気分を必死に抑えていた。

ここでしっかりと反省した姿を見せないと、この心配症の友人の怒りは益々上がっていつてしまうだろう。

二人がいるのは。このディエナーの高級レストラン……というわけではない。

この街を知り尽くしているキュベレが好んでよく使っている、隠れ家的な小さな小料理屋だった。学生時代、法学の分厚い本の角で殴り飛ばされた記憶がよみがえり、なんとなく頬に手を添える。あの時は顔が歪むかと思つた。

キュベレが連れて来た店は、確かに少々手狭だが注文を受けて出てくる料理はどれも美味しく、値段も手ごろ。

小銭を稼ぎながら旅をしているレーゼからすれば、よくぞ教えてくれたと友人を抱きしめたい程素晴らしい店だった。

「まったく、アンタの事だからどこかの自治軍に入り込むか、国境警備軍の方の実習に志願していると思つていたわよ」

しばらくするとキュベレの小言の方も沈下し、互いに酒を酌み交わしながら雑談に興じるようになっていた。

もつともキュベレとしては、彼女との雑談から彼女の家や中央の動きを把握したいという後ろ暗い理由もあった。

テレーゼも薄々それに気付いていたが、特に気にはならなかった。

「ああ。お前の予想通り、受けに行ったんだが——士官も実習も断ら

れてな」

「……はあっ!？」

キュベレはありえないと言う顔で声を上げた。

なぜなら、それは本当にありえない話だからだ。近年、隣国はどこも軍備を拡張しており、士官学校を卒業した候補生はそれに対応するためにすぐにどこかの軍に派遣、あるいは引き抜かれて実務経験を積まされる事になっている。

例えばこの西部では、国境に面していない代わりに広大な海の調査、管理をするための海軍を有しており、その士官を育てるために毎年一定数の士官候補生を抜擢し、主な港町へと派遣している。ついでに言えば西部はその複雑な歴史のために、自治軍及び警備隊も他の領地よりも多めの数を揃える事を認められている。

テレーゼはキュベレ達の世代を代表する剣術の腕前を持っている。それがまさか士官候補実習すら断られるなど、どう考えてもありえない事だ。というより、あつてはならないこととすべきである。

「どうやら、母様が手を回していたようだ」

「嘘でしょ? それこそありえない——」

「事実だ。裏付けも取った。オマケに、どうやら私を有力貴族の娘とくつつけたかったようだ……」

テレーゼはグラスに入った酒——いつも飲んでいる麦酒ではなく、この土地の蒸留酒に口を付け、チロつと舌で味わう。

その様子に、キュベレはなぜ友人が何も言わずに姿を消したのか、なんとなく分かった様な気がした。

「母様は一体何を考えているのか……。正直、このまま放浪の旅人として諸外国を周るのも悪くないかと思いついていた所だ」

「あんたが弱気になるなんて、らしくないじゃない。いつも自信満々で切り込み隊長を務めていたテレーゼがさ」

「……すまない」

「……………本当にまいったようね」

先ほどからグラスは進むが、フォークの方は進まない。かといって酔いが回っているかといえば、やはりそうではない。

キュベレはグラスを傾けながら、しばらく何事か考える。

「もうすぐ、この西部に『隻腕』が来るわ」

「スレイが？」

自分が振るっていたあの剣に憧れて、細身のレイピアや似たような片刃の剣を用意して振り回していた妹を思い出し、レーゼは何とも言えない気分になった。

決して彼女の事が嫌いではない。むしろ、今でも妹を——スレイのことを愛している。

片腕というハンデを背負いながら努力を止める事のないその姿に、その在り方に必ず妹は立派な騎士になると確信していたし、なつてほしかった。

だが、士官の道を絶たれ放浪の旅を送る自分と、帝国でも有数の実力者を有する騎士団への士官実習が認められた彼女を比べ、嫉妬とも憎悪とも哀愁ともつかない複雑な感情に苛まれるのも確か。なにより、そのような醜い感情を抱かずにはいられない自分が、よりいっそうみじめな存在に思えてならないのだ。

そう簡単にこの感情を解決できそうにはなかった。

「しかし、この西部に……やはり何かあったのか？」

近年までは、確かに原住民や旧開拓民との衝突が起こっていたが、あのハウゼン卿が入る前には両者共かなり疲弊していたために活動は下火になり、本格的に彼女が内政に手を入れてからはかなりの落ちつきを見せたと聞いていた。

それが、まさか妹まで来る羽目になるとは——傭兵達が集まりだしているのをこの目で確認している事もあって、ただ事ではない何かが起こり始めているのかと、テレーゼは推測する。

「……まあ、色々よ。で、さ？　ちよつと私から提案があるんだけど……」

キュベレは本質にはまだ触れず、身を乗り出す、

「リディア様に会ってみない？」

そう切り出した。

思いがけない言葉に、テレーゼは目をパチクリさせる。

そういう顔になるのを予想していたのだろう。キュベレは学生時代によくテレーゼから『あくどい』と言われていた笑みを浮かべる。「ひよつとしたら、手にする事が出来るかもよ？ 騎士に成れる程の栄誉を」



(妙な女だ……)

湖のほうから吹いてくる風を受けながら、スレイは素直にそう思った。

先ほどまでこちらが一方的に刃を突きつけ、いつ斬り合いになってもおかしくなかった状況であつさりと手にした得物を渡した女。

その当人は、今自分の目の前で焼いた魚の肉と野菜をパンに挟んだ物を美味しそうに——表情は分からないがそう感じた——頬張っている。

(シノブ……か。変わった名前だ。剣の使い方も、型の様なものはあるみたいだが帝国のそれとは違う……異国の者か？ だが間者にしてはあからさまに怪しすぎるし、名前もどうやら偽っているというわけではないようだが……)

未だ完全に信じたわけではないが、一応の和解をした相手の素姓に想いを馳せながら、スレイは姉が使っていた二振りの剣を片手で器用に、丁寧に布に巻いていく。

「まさか、あの姉上が剣を捨てるなど……考えもしなかったな」

あつさりと降参したシノブは、そのあと身振り手振りで声が出にくいため、口が利きづらい事を私に伝え、マントの下からいくつか白い葉を出し、筆談で自分に状況を説明してきた。

火災に顔を主に色々な所を焼かれ、隠している事。声が変な事。そ

してあの剣を手にした理由と行く先を。

——そこまで追いつめられていたのですか。レーゼ姉さん……
なんとなく呟いた声に反応したのか、シノブがこちらを振り向いた。やはり顔は見えない。

正直、無理やりにもマントを剥ぎ取ろうとも思っただが、もしそれを実行すれば、この女は全力で抵抗してくるだろう。マントを取れと強い口調で言った時ですら、ほとんど開くことのない口で『それだけは出来ない』と伝えてきたのだ。

あまり聞いたことのない、独特な低さを持つ声。

その不思議な響きと、声から伝わる必死さ——覚悟とも言えるかもしれないそれを耳にしてから、不思議とそんな気はなくなってしまう。

(それに——戦えば恐らく勝てる。が、無傷では済むまい)

一度切り結んだだけだったが、スレイはシノブの剣の腕をかなり高いと推測していた。

今まで初見では——それこそ姉のレーザーや母という例外はあったが、それでもかすり位はする一閃をこの女は見事に弾き、無効化した。

それだけでも大したものだと思うが、スレイが注目するのはそこではない。

その後の立ち振舞い、そして勝てないと見るやすぐに降参した。

あの潔さは、命おしきの臆病風から来るそれではない。おそらくはこちらの方が生き残れる可能性が高いから選んだだけで、もし自分が山賊か何かだと思われていれば、生き残るために戦いを続けただろう。

(弱者の戦い方。言うのは簡単だが……)

実際には、そのような戦い方は常に多くの選択肢を見だし、そして即座に決断しなければならぬ。

例えば自、数度討伐のために剣を交えた山賊や野盗達は、最初に逃げるか戦うかを決めれば後は何も考えずその通りに動くのがほとんどだった。

戦い方もそうだが逃げる時も効率など考えず、ただ走るだけ。ただ背を向けるだけ。

命がかかっている時にこそ、冷静になれ。

剣を取るものには基本中の基本だが、基本ゆえに難しい。

(コイツが振るうのは生き残るための剣。そのような剣を振るうのはプロの冒険家かトレジャーハンターかあるいは……まさか、どこかの武家の人間か?)

「それにしても、随分と丁寧に手入れをしてくれていたのだな。重ねて礼を言う」

シノブは、口を開かずに手を軽く振る。

大方、返すものだから当然だ、とかそういう類の事を言いたいのだろう。会話をしている唯一確信できたのは、この女の育ちがかなりいいということだ。

これがそこらの農民等ならば今頃剣など売り払い、生活のための資金にしていることだろう。

(とはいえ、下に着ている服は布を端切れを縫い合わせて作ったモノの様だが……)

いつの間にか、シノブという変わった女について様々な推理をして楽しんでる自分がある事に気付き、スレイは思わず自嘲した。

だが、それほどシノブという謎の人物は警戒心と共に程良く好奇心をくすぐる人物だった。

(加えて謙虚で正直者。いや、ある愚直というべきか……)

「街に着いたら、礼の代わりに食事でもどうです?」

「……気にしなくていい」

ようやく口を開いて出た言葉は、たった一言だった。やはりということかなんというか予想通りのものだ。加えて、少し声を小さくして続けた言葉は、もし関所付近まで行って会えなければ一本を売って残る一本を腰に差すつもりだった事という告白である。

(……不器用というか、ある意味無邪気というか……)

ここまで馬鹿正直な者を、スレイは出会った事はおろか聞いた事もなかった。

「普通ならばわざわざ剣を渡しに旅する者などいない。たまたま進路が同じだとしても、そのように愚直な者などまずいないだろう。誇れ、シノブ。お前の在り方は下手な貴族よりもよっぽど貴族らしい」
心から思った感想だった。

素姓も含めて怪しいとは思っているが、シノブが本当に姉に剣を返すために動いていた事に関してはもはや疑いなど微塵も持っていないかった。

シノブはそれを聞くと迷ったような素振りをみせ、そのまま食事を再開し始めた。

(? ……ああ、ひよつとして……照れているのか?)

シノブがフードの下でどういう言葉を返そうか困惑している姿を想像し、なんとなく可笑しくなった。

シノブは、まるで罰が悪そうにそっぽを向いたかと思うと、先ほど食べていたものと同じ簡単な軽食——サンドイッチというらしいものを手早く作り、こちらに押し付けるように手渡してきた。

その仕草にも可愛さを感じながら、スレイはそのサンドイッチを受け取り一口かじる。

日の光を浴びながら、絶景を肴に変わった女と共に取る食事は、最近食べていた基地の食堂の味とは違い、招待される食事会で出される豪華なものとも違う。かといって実家で食べていたような質素儉約な味とも——やはり違う。

(分かんないが、悪くない。悪くないというのなら……まあ、良いことだろう)

そう結論を出したスレイは、心地よい風を浴びながら二口目を口にする。

その隣では、手で押さえられている黒ずくめのフードが持ち主の顔を覆ったまま、西から吹いてきた風にふわりと揺られていた。

暗躍する『少女』

「本当に大した腕前だな。狩猟のために覚えたと言うが、それだけの精度ならば戦場でも使えるぞ。お前のその投擲術は」

一週間程前の出会いを経て、どういう訳か同行することになった刀の持ち主の妹——スレイが手放して褒めてくれる。その事にむずがゆさを覚えながら、俺は彼女に頷いて答えた。確かに、投擲術は獲物を捕らえるために覚えた物だが、賊等から逃げ切る時や、獣相手への牽制などに使う事も多い技術だった。

頷いたことにスレイは納得したのか、何度か首を縦に振る。

(間接的な俺の情報収集か……?)

俺はたった今自分が撃ち落とした鳥を捌くために、懐からナイフと革袋を取り出す。スレイも、こういうサバイバルには慣れているのか、手早く鳥の羽をむしっている。

最初はどうなる事かと思っただものの、意外にスレイはあまりこちらの事には踏み込んでこずに、ある程度はこちらの話を信じてくれた。

ある程度——というのは、あくまで俺が彼女の姉に刀を返そうとしていた事だけで、恐らく素姓などは未だに疑われているのだろう。

(今まで村の人達からはあんまり疑われなかったけど、騎士——つて
いかに向こうで言う警察の様な人達はさすがに誤魔化せないか。さて、どうしたものか)

例えば相手が寝ている内に、彼女には悪いが刀ごと置き去りにして旅に出ようかとも思ったのだ。もともと、そんな事をしようものならば確実に不審人物と思われる、最悪手配されるかもしれない。加えて相手は馬も連れている。

(まあ、フードは剥ぎ取られていないようだけど)

俺はあくまで自分が『寝ている』時しか自分は活動できない。ごく稀に『こちら側』で普通の夢を見て、二、三日分の体験をすることもあるが滅多にある事ではない。

俺がいつも宿などを取らずに見つかりにくいような場所で野宿を繰り返していたのは、いざという何かが起こりにくい場所を選んだた

めでもあった。なにせ、これから向かうディエナでは追手が出されて
いる可能性だってあるのだ。

彼女と出会ってからの数日は、基本的に彼女が自分の分も宿を取る
ため、俺はいつも以上に警戒しながら寝る——『起きる』ハメになっ
ていた。

考えている内に血抜きが終わっていた。俺は素早く首を切ってぶ
ら下げていた鳥を縄から外し、手早く捌いていく。

ついでに言えば、どうにもスレイは俺の料理を気に入ったらしい。
食材として捕えた獲物の値段に少々色を付けた程度の金銭を押しつ
けられ、気が付いたら「調理係」のような役目を承っていた。

捌き終わり、手持ちの調味料を塗り込んでいく様子を興味深そうに
見つめる視線を感じながら、これからどうやって生きるか考える。

(このままディエナまで行っちゃいそうな感じだけど。まあどうにか
なる……多分、うん。……なると、いいなあ……)

実は、すでに関所は通ってしまっている。下手すれば今日明日中に
はディエナに着いてしまうのではないだろうか。

関所の前で別れを告げようとしたのだが、スレイが強引に押し切っ
たのだ。

従者扱いという事で、気がつけば通行手形まで受け取っていた。

本当に出国できるのかは怪しい所だったが、こつちに関しては、以
前その深い森の中を突っ切った事もあるのでそこまで心配はしてい
なかつた。

(まあ、今はお腹を空かせた騎士様の胃袋を掴むために全力を尽くす
としますかね)

すでにスレイはそこらの石を積んでかまどを作り、俺が肉を捌き終
わるのを待っていた。

「ん？ どうした？ じつとこつちを見て」
「……………」

俺を疑っているのは間違いない——と、思う。思うのだが……それ
にしては時折、随分と無邪気に自分と関わる彼女の態度に半分呆れな
がら、首を横に振ってから鉄板を取り出しかまどの上へと乗せる。

(やれやれ、怖い。いざという時のために当分の間スリングをいつでも使えるようにしておいたほうがいいか。まあ……)

こうして、まるで中学の時の親睦キャンプの様に、誰かと料理をするのはいつ振りだろうか。誰かと共に食事をする。これも確かに当たり前のことだったが、この世界で唯一の男である俺には難しい事だ。

火打石を火種の傍で軽く打ち付け火花を散らし、軽く焦げた火種にそつと息を吹きかける。徐々に立ち上がり始める煙は、西から吹いてきた風になびかれながら、そつと空へと消えて行つた。

デイエナまで、もうさほども離れていなかった。



それから二日も経たないうちに、俺とスレイはデイエナへと足を踏み入れていた。

あの時とほとんど変わらない、懐かしい街の光景を見て、なにやら感慨深い物を感じる。

同時に、およそ二年前に自分が逃走劇を繰り広げた街までこんな短時間で着いた事にも少し驚いていた。

(まあ、森の中で迷っていた時期が多いし当然か)

あの時、自分がパジャマの上から今のマントの材料の一部にもなった黒いぼろ布を纏って駆け抜けた街道を逆方向に歩いていく。やっぱり妙な感じだ。

目立つパジャマのままでは逃走や戦闘はおろか山歩きにも向かないため、今は出来るだけこちらの衣類に似た服をどうにか繕って、その上から黒い外套を着込んでいる。

かつて自分達を追い回した騎士達と同じ軽甲冑を着込んだ女達はこちらを見ている。

彼女たちの目に、あの時のような興奮は感じない。もつとも、こち

らを怪しんでか素姓を探ろうとする警戒と好奇心の交じった視線なら、それこそ雨の様に感じているが。

いつもと変わらない真っ黒なフード付きの外装姿。だが、一つだけいつもと違う所が合った。

腕にはめられた銀製のいかにも高価そうな腕輪。ライオン——獅子と茨が絡みついた盾をメインのモチーフとした、リアフィード家の家紋が彫り込まれたそれが、今現在シノブの身を保障してくれる物となっていた。

騎士に案内されて城へと入って行ったスレイが、街にいる間不自由がないようにと貸してくれたものだ。

(まあでも、スレイが一人で城に行ってくれてよかった。もし中にまで連れてかれて『貴族に会わせてやる』みたいな事言われたらホントどうしようかと……)

やりかねないのがあのスレイという女だ。一見普通の少女で、普通の騎士かと思えば、ときたま奇妙な行動を取る。いくつかはその意図を推察できるものもあれば、首をかしげざるを得ない事もある。

(この腕輪も……まあ、それなりの信用は得たって見るべきなのかな？ いや、それにしても重すぎるんだけど……)

太陽にかざせば、銀特有の鈍い輝きを放つ。間違いなく本物の銀だ。

素姓のしれない不審者に『貸してやる』と簡単に手渡せるような代物ではない。

家紋が入っているとと言う事で、その価値は倍増どころではない。悪用したい者達が大金を支払ってでも手にしたいと思うだろう。むしろ俺を殺してでも奪い取ろうとする奴だって出るだろう。

……あれ？ デメリットの方が大きい？

(考えても仕方ない。とりあえずもらったお金で残った装備を整えるか。いくつかもらいはしたけど、刃物類は実物を見て買いたいし、剣は最優先で買わないと)

ここまで使わせてもらった刀は、当たり前だがスレイに預けている。

彼女曰く、姉のテレーゼという女性が西部に辿りついていいるのなら見つけ出すのはそう難しくはない事らしい。

ともあれそれが意味する事は、ここで剣を用意しないと自分はあるいつ折れてもおかしくないボロ剣でまた旅をしなければならなくなると言う事だ。

幸い道中の食事の代金と刀二本の輸送代、そしてなぜか護衛代金なるものまで押し付けられ、それなりにまとまった金をシノブは手にしていた。

(手元にお金があると不安が残るな。ガキの頃からお年玉もらうと妙に緊張するタチだったし)

いっその事持ち金を一気に使いきって旅に出ようかとも思うのだが、少なくとも今日は無理だ。スレイに待てと言われているし、腕輪も返さなくてはならない。なにより既に自分の分の宿が取られている。

変な言い方かもしれないが、どうやらスレイは自分を逃がす気が無いらしい。

(いいや。とりあえず剣を買いに行こう。刀に近い奴があればいいんだけど……)

得物が無くては、この世界で旅をするのは難しい。

とりあえず辺りの看板を頼りに、商店街を探し出す所から始めるとしよう。

果たして、スレイが自分を手放してくれるのか。旅に戻れるのかという問題はいったん棚上げしておく。

人はそれを——現実逃避というのだが……



「どうやら、ハウゼン卿は自治軍を三つに分けるようです。中央から預けられている帝国軍は相変わらず、中部との境目となるグリーンバル

ト岩へと待機させている様子……これは好機では？」

蠟燭の灯りだけが、その暗く広い部屋唯一の光源となっていた。窓は閉め切っているし、そもそも今は夜。月明かりは入るだろうが、特に意味はない。

「となると、あの街に残るのは本隊のみか。……どうする？　こちら側に着く者達を蜂起させるか？」

およそ十人程の老若交じった女達が、その蠟燭を真ん中に置いた円卓を囲んでいた。椅子はあるのだが、そのほとんどが座らない。いざという時に逃げ出しやすいように、そして、この場の誰かが襲つてきても対処できるように。

一つの目的のために集まっている集団だが、所詮は利で集まっている集団であり、誰もが誰をも牽制し合っているという事を全員が理解している。

「私は賛成だ！　ここで旧開拓民や原住民たちが暴れてしまえば、中央もハウゼンの和平策の成果を疑うだろう。なにもあの女の首を獲る必要はないのだ！」

「だが、即座に鎮圧されてしまえば下火に終わる。蜂起の声に血気盛んとなつているものは少なくはない……そして、同時に多くもないという事を忘れてはなりません。ここにいる大多数が求めている物が混乱ではなく、最大限の利を手にするためだという事も」

一人の老女がそう苦言を呈すると、周りの人間は揃つて口を噤んだ。

確かに、動かせる人間は多いとはいえ相手もまたかなりの兵力を擁し、それを指揮するのはあの『知の女傑』であるという事実は、彼女達の決断を迷わせるのは当然だった。

「——それに協定を忘れてもらつては困りますねえ。小さな小競り合いで終わってしまうのならば、私がここに参加する必要はないでしょう？　それならば、最近クリシア隣国との睨みあいが続いている東部の方が金になる。私は貴方達程、現状に満足していないというわけではないのですよ？　お分かりですかあ？」

「……っ！　貴様、商人風情が!!」

つまり、どれだけ策謀を張り巡らした所でまとまりがないのだ。策謀どころか会議一つ前に進む訳が無かった。

背の低い、モノクルを付けた少女の商人の不遜な言葉を皮切りに、会議はただの罵り合いへと成り下がった。

(……つまらない)

利権に群がる蟲達を眺めながら、その集団の中で一番若い——年の頃は14〜5くらいだろう少女は、たった一人だけ席について静かにため息を吐いていた。

「おや、退屈かい？」

数ヶ月前に護衛として少女が雇った、中々に背の高い傭兵が後ろから気安く少女に声を掛ける。普通ならば仮にも契約相手、そんな事は許されないのだが、この少女はむしろそれを喜んでいった。

少女は、自分よりも6つは年上のこの傭兵が気にいつていた。元近衛騎士というからどことなくそ真面目な奴かと思えば、意外に話が分かる。世の中に正義はある。帝国にあると息巻いている馬鹿どもに、数百分の一でいいからその柔軟さを分け与えて欲しい程だ。

藍色のシヨートヘアに、猫を思わせるような吊り目。そして高いその身長にふさわしいしなやかな体つき。ただ色気ばかりしか能のない女とは違う。

未だに色良い返事はもらえないが、出来る事ならば完全に自分のモノにしてみたい。部下としても——閨の相手としても。

「ええ、退屈よ。これならあの時の馬鹿騒ぎに張り付いておけばよかったですと思っているわ。どうやら私の予想を大きく外れているようだし」

「ああ、例の……」

傭兵は、二年前に起こった騒動を思い出し、苦笑を浮かべた。

「ただの与太話。あるいは、混乱状態を見せつけるためのハウゼン卿の策というのがお前の見方じゃなかったのかい？」

「彼女達が緘口令のいくつかをあえて見逃したというのなら、そうでしょう。でも、あの混乱具合。ハウゼン卿がミスを犯したとみて間違いないわ。そして出回っている噂の中で彼女達が介入している情報

を見つけ出し、整理していけば何を隠したいかなんてすぐに分かるわ」

少女は、自慢の長い金の髪を指にクルクルと巻きつけながら嗤う。

「どうやら、領主様は最高級の宝石を取り損ねた様よ？ ふふ……無様ね」

文字通り、この世界を揺るがしかねない『宝石』を思い、彼女は静かに笑みを浮かべる。

もし、この場の誰かがこの時彼女が浮かべた笑みを見ればこう表現しただろう。——『壊れた笑み』だと。

だが、その場でただ一人それを認識していた傭兵には、それこそが世界で最も純粋な笑顔だと感じていた。

そう、この少女の浮かべる笑みこそ、世界の真理だと。

「ねえ、感じてる？」

そして空いた方の手で、そつと傭兵の手の甲に触れる。

傭兵は周りの喧騒すら気にしないそのいつも通りの様子にうんざりした様子で、

「私に子供を相手にする趣味はないよ、いつもそう言っているだろうに……」

「フフ。今はそれでいいわ。いずれ必ず振り向かせてあげる。それよりも答えてよ、シオン」

傭兵——シオンは苦笑と共にため息を一つ零し、答える。

「ああ、感じているよ。あそこにいる不感症の連中とは違うんだ」

シオンのその返しに、少女は思わず噴き出しそうになるのを堪える。

同時に、その身を喜びが満たしていく。

やっぱり彼女は感じているのかと。共に同じものを感じてくれるのかと

そうではなくては。そこなくては。

「ええ、シオン——世界が動くわ」

ハッキリと少女は断言する。

その顔に愉悦を浮かべながら、少女はセリフを歌い上げる役者の様

に口を開く。

「私の五感がそう告げている。私の身体がそう感じている。私の頭脳がそう叫んでいる」

世界が動く——少女が断言した言葉に、シオンは口の両端を吊り上げる。

彼女もまた、それを待っていた一人なのだから。

「それで、雇い主様は望むのかい？ 『宝石』を——」

「さあ、どうかしら？」

シオンの問いに、少女は答えをはぐらかした。正確には、まだ答えは決めていない。

「ただ眺めるだけにするのか、身につけ見せびらかすのか、あるいは誰かへプレゼントするのか……まあ、でも」

——すぐに取れるよう、手の届く所には置いておきたいわね。

少女——雇い主が望みを呟いた。それに傭兵が返す言葉など、一つしかない。

『邂逅』

「——これが、今の西部を取り巻く環境よ。大変な時期だけど改めて……デイエナへようこそ、スレイリアフィード。あなたの噂はこの西部にも届いているわ。いずれ、帝国を支える支柱になるだろう傑物だと……」

「はっ、恐縮でございます」

目の前で質素な玉座に腰をかける女性。珍しい青みがかつた銀髪——どこか姉のソレに似ている髪に目を奪われながら、スレイはその奇妙な圧迫感に圧倒されていた。

（これが……ハウゼン家の才女。母様が言っていた、敵に回すのは得策ではない相手……）

かつて母に、尊敬できる貴族は誰かと姉と共に尋ねた事があった。いくつか上げられた名前の中で、姉よりほんの3つ年上とはいえ、当時まだ少女といってよかったリディアⅡハウゼンの名が挙げられていたのは今でも覚えている。

「それほど畏まらなくてもいいわ。この会談は非公式なものだし、なによりよくこのタイミングで来てくれたわ。貴方はもちろん、貴方の母君にも直接お礼を述べたいくらいよ」

ニツコリとほほ笑むハウゼン卿の言葉にスレイは感心し、誇らしさと共に改めて頭を下げる——などという事はない。

返答しつつも頭は下げ、同時にスレイは言葉の裏の意味を取ろうと
していた。

（直接お礼……会いたいと言う訳か？ 今回の派遣のタイミングの良さを問いたいのか……）

確かに、母からの命とはいえ今回の派遣は自分も疑問に思っていた。

少しは名が知れてきているとはいえ、所詮は士官学校を卒業したばかりで実戦経験のない——おまけに士官実習すら始めたばかりの小娘を、突然西部に向かわせるなど……。

（母様が、西部の詳しい情報を裏の裏まで知っていたと言う事か）

それもまた不思議ではない。もはや公然の秘密となっているが、リアフィード家には情報収集を生業とし、腕の立つ者を囲い入れている。実際に自分は目にした事はないが、彼女達ならば西部の詳しい事情や裏の動きを調べる事も出来なくはないだろう。

だが、仮に調べ上げて知っていたとしても、それならばなぜ自分を西部に送り込んだのかという疑問が出てくる。

手柄を立てさせるためなのか、実戦を経験させるためなのか、それとも違う思惑があるのか。

そしてそのことについて、目の前の美女が自分になに一つとして聞く事をしないのは、自分が母から何も知らされずにここに送られてきた事を察しているからなのだろう。

母から、そして『才女』からも、ゲームの指し手ではなく精々が少し使える駒程度にしか見られていない。そう感じた。

(シノブなら……。あの女が同じ立場なら一体どのように立ち廻るのだろうか?)

気が付けば、妙に彼女にこだわる自分がいる。それこそこの一週間ほどの旅で、シノブという存在が多様な技術を持った旅人だという事が良く分かった。

狩猟はおろか、戦闘に使える程高い精度の投擲術、調理技術、生存技術、野草や毒物に対する知識の蓄積、剣の腕。様々な視点から見ていると思われる考察。時折見せる機転と決断力。

(ああ、そうか)

本当ならば、剣だけ預かってさっさとこの町に来ればよかったのだ。馬を走らせればとつくにこの町に着いていたはず。それでも――貴重な時間を割いてでもシノブとの旅を望んだのは……

あの不審な女が、自分に足りない物を持っている事をどこかで分かっていたからなのだろう。

(無理は承知で、頼みこんででもここに連れてくるべきだったか)

声を発することを好まず、顔を晒す事を絶対にしない彼女がこの場にいたとしても出来ることなどない。むしろ、不審者を領主の前に連れてきた女としてこの上なく悪い印象も着くだろう。

だがもし——もし彼女が自分の隣にいてくれれば、ただそれだけでどれほど心強い事か。

(さすがに機密を口にするにはできないが……。後で少し相談してみるか)



(……なるほど、こういう娘だったのね)

リディア＝ハウゼンは、目の前の少女が自分に対抗心を持っていると気付いていた。そして、同時にどこか楽しげな雰囲気醸し出す少女に対して、先ほど下した評価を一つ繰り上げることにした。

確かに士官学校では高い評価を受けていたようだが、リディアの経験則としてそういった者は得てして、どのような者でも自尊心を刺激され野心的になりすぎる傾向があるものだ。

だが、この少女にはそういった慢心の類を見受けられない。

(まあ、少し頭は固そうだけど……)

なんとなく、自分の騎士に——ベルヌーイに似ているかもしれない。

これから経験を積みれば優れた將軍になるのは間違いないだろう。先日部下のキュベレが連れてきた姉のテレゼも才を感じさせたが、『面白さ』ではこの少女の方が一つも二つも勝っているだろう。

そして、部隊を率いる能力もある。お世辞にも高いとは言えないが、調べさせた訓練の内容を見る限りでは部隊管理から危機管理までよく出来ている。実戦でどうなるかは少し分からないが、そもそも今回彼女に望んでいるのは極論を言えば部隊の管理と命令の遂行だけなのだ。彼女に預けるのはベルヌーイが鍛えた兵士達と数人の副官。能力は十分だし、そもそも戦闘にならない可能性も高い。彼女の部隊

にやってもらいたいのには相手の注意を引く事と、このデイエナに補充とはいえ外から戦力が来た事をどこかの『愚者』達に知らせる事だけなのだから。

他にもいる將軍は、例の『男』を探すために大森林の周囲を警戒していたり、あるいは愚者がこちらが用意する『餌』などお構いなしに暴発を起こした時のために伏せていたり、誰もが下手に他人には漏らせない仕事ばかりを請け負っていた。

(信頼できない者が多いからといって、少数精鋭で強行してきた事が仇になったわね)

とりあえずは外部の人間とはいえ、下手な貴族よりもよっぽど信頼できるこの少女に任せよう。

ただ、一つだけ気にかかる事があるとすれば――
(報告にあつた黒衣の従者って、一体何者なのかしら?)

目の前で跪く騎士の卵を見ながら、この場にはいない人間についてり
ディアは僅かに首をかしげた。



やはり活気のある街だと、品の種類も数も村のそれとは比べ物にならない。

旅人用の頑丈な靴に地図、新品の火打石に小さな鍋、新しいスキットボトルを購入し、つい先ほどは狩猟具店でナイフ三本に刃物の手入れ道具、使用頻度の高いスリングはしっかりとした物を購入、予備として値も質も下がるがそこその物もいくつか買い揃えた。

スリングは持ち物の中でも特に消耗が激しく、かつ使用頻度も高い。シノブは始めから、スリングには金をかけようと考えていた。

(でもやっぱり日本刀は置いてなかったか。まあ、良い剣は一応買っ

たけど……)

今シノブの腰に差さっているのは、ファルシオンと呼ばれる片刃の片手剣である。扱いやすい武器として傭兵にはそれなりに人気の剣らしいが、そのためか貴族や騎士からは『庶民の剣』として余り使われる事が無いらしい。

銀の腕輪を付けていたためか貴族と勘違いされたシノブが、ファルシオンを選んでカウンターへと運んだ時に、店主がそのように言っていた。

(やつぱりそこらへんがよく分からん。役に立つかどうかってのも無視できない要素だと思っただけ……。騎士からすれば目立って見栄えのいい武器の方がいいのか?)

ともあれ、最優先で買い揃えなければならぬというもの全て揃えた。その気になれば今すぐに旅に出る事が出来るだろう。

だが今日はすでに泊る所があるし、代金という形とはいえ、かなりの大金を支払ってくれたスレイに何も言わずに勝手に出て行くような不義理な事はしたくない。貴族だし。権力を持つてる人だし。

とりあえず待ち合わせの時刻までまだ時間はありそうだ。

暇つぶしも兼ねてシノブは、宿や近くの市場を歩きまわって食料品に目を通していった。

どういう物が食べられる物なのかを知っておく事は、シノブのように野宿が主軸となる旅人にとっては必須事項だ。この世界の知識や常識を知らない者ならば、なおさら。

現実世界のそれとは似て非なるものが多い世界、なんとなく似ているからと気軽に口にしたもので腹を壊したり死にかけるなどというみっともない事はしたくない。

——二度と、だ。

(この一週間で調味料も大分減ったし補充して……ああ、保存食も買っておかなきゃ。金のあるうちに長持ちするものを買っておかないと)

この街には海などないが、どうやら西部では海鮮物が豊富に取れるようだ。

魚を開いた物や貝柱と思われる物が干物として売られていた。

この世界で肉や野草、卵を主軸に食べてきたシノブにとって、海鮮物は非常に興味をそそられる食材だった。

買おうかどうか、財布の中身と相談する。装備の方はかなり金銭を割いたので、少ない訳ではないのだがどれほど使えるのか、把握しておきたかった。

「あら、足りないのですしたら少しお出ししましょうか？」

「……………」

突然、背後からかけられた声が自分に向けてのものだという事に気がつくのに一拍かかった。

恐る恐る振り向くが、人の姿は見当たらない。ふと、視線を少し下に向けてると、

「代わりと言ってはなんですが、よろしければ少々お話に付き合ってくださいませんか。貴女のような方、この街で見たことないですわ。外から来た方なのでしょう？」

車イスに腰をかけ、右手で長い金髪をクルクルと弄っている少女がいた。

質素ではあるが質の良い服装からして、ただの庶民ではないだろう。護衛や従者らしき人間が周りにいないのが少々気になるが――。

「…………生まれつき声が変わね。ついでに顔も火傷が酷いから隠している。こんな不審者が案内人でいいのか？」

「ああ…………。では、顔を隠すのはそのためなのね。ごめんなさい、私はこんな身体のせいで外はおろか街を歩くのにも不自由だから…………」

「そういうながら少女はさきほどまで髪を弄っていた右手をブラブラさせる。」

「話し相手が欲しいのよ。特に外から来た旅人の話は是非」

少女は、シノブの身体を外套越しに透かして見るように眺める。

ひよつとして、なにかに気がつかれたのかと、シノブが外套をそつと手繰り寄せる。

「私、こつみても人を見る目はあるのよ。あなたみたいに優しそうな旅人さんは初めて見るわ。それに――」

少女はシノブの腕輪を指し示す。

「貴方にそれを渡した人は迂闊だわ。貴族と繋がりのある旅人なんて、好奇心の的になっておかしくない。そんな人がブラブラと市場をうろついていたら良くも悪くも注目の的」

とつさにシノブは、この少女がリアフィード家——スレイの家になんらかの害意を持っている人間ではないかと考えた。

「だから、私とどこかでゆつくりとお話した方がいいのではなくて？もちろん、貴方の好きな時間に立ち去ってもらって結構よ？」

そういつて、少女はニツコリと笑みを浮かべる。とても可愛らしい、無邪気な笑みだ。だが——

(……確かに暇ではあったし、必要以上に人目を引くのも不味いんだが……)

色々考えた結果、

「知っている人間がいる宿屋がある。そこの一階でなら」

と伝えた。場所を限定させてもらったのだ。

知っている人間というか、宿を取った時に受け付けてくれた女性の事なのだが、その人の目の届く範囲でなら、大事になる可能性は減るだろう。

ここで無理矢理振り切った所で、リアフィード家の関係者が足の不自由な物を置いてけぼりにしたというような噂が経つのは拙い。

(やっぱりこれは手枷みてーなもんか。スレイもああ見えて中々やる……)

腕輪一本に自分の行動がかなり制限されている事に気が付き、思わずため息を吐く。

逆に少女は、シノブの提案に頷いて『それでいいわ!』と喜んでい

る。改めてため息をつきたい気分になりつつ、シノブはお礼や金銭の類はいらない事を伝え、手早く先ほど買おうとした干物を購入し、袋に詰めてから少女の後ろに回って車いすを押ししていく。

少女は、シノブが車いすを押ししている間はろくに会話が出来ないためか独り言に近い事をひたすら話し、時折シノブの方を振り返って笑

顔を浮かべるだけだった。

可愛らしい笑顔。無邪気な笑顔。そうだ、確かに先ほどもそう感じた。

だが、シノブにはなにか——具体的ではないが違和感を覚えていた。

時折彼女が振りかえり、笑みを浮かべてまた前を見る。

その時、すでに振り返って顔など見えないはずなのに、なんだか彼女の笑顔が——笑みがそこにまだ残っている様な印象を受けるのだ。

（なんだったつけ。なにかの童話に出てきた笑みを残したまま消えていく動物……猫？ ああ——）

しばらくの間、読んだことのある童話を次々に頭の中で挙げていき、そしてようやく思い出した。

——ニヤニヤ笑いのチエシヤ猫……だっけか。

『』と『猫』

「平和になったからこそ、争いの火種が産まれる。皮肉だな」

テレーゼは剣——村で買った安物の剣ではなく、支給された金で買った地味な、だが実用性の高い剣を念入りに手入れし、磨き上げながら苦笑を浮かべる。

キュベレには口が裂けても言えないが、男を探し出すなどという今にして思えば無謀すぎる思い付きを実行に移してみれば、まさかこんな話が出てくるとは思ってもいなかった。

西部が誇る名将ベルヌーイと行動を共にし、彼の者の指揮に従え。

それが『知の女傑』リディアⅡハウゼンからの依頼だった。あくまで傭兵としての立場だが、文句など一切なかった。仮にリアフィード家の長女として参加すれば、あの母がどのような手を回すか分からない。

ハウゼン卿は、今回の事が上手くいけば海軍実習士官として雇い入れる事を確約してくれた。

海軍は、今でこそさほど目立つ軍組織ではないが、近年の観測で海の向こう側にも大きな大陸があるらしいという話が出ている。もしそれが本当ならば、他国からの防衛のための戦術研究や開拓のための重要な組織となる事は間違いない。

博打の要素もあったが、決して損な話ではないだろう。

ふと、今頃この街に向かっているはず——ひよつとしたらもう着いているかもしれない妹の事を思い浮かべた。

この一件がうまくいけば、あの妹にも腹を張って話す事が出来るのではないだろうか。

彼女に家を飛び出た事、胸に秘めているこの複雑な思いなど、胸の内を洗いざらい話して……そしてもし、もし許してもらえるのであれば、彼女と和解できるのではないだろうか。

(この後は確か会議だったか……。スレイが到着しているとすればその時に顔を合わせる事になるが……)

なんにせよ、せつかく得た機会に無様な真似など晒す訳にはいかない。

テレーゼは自分の調子を整えるためにも、与えられた宿舎を出て共用の鍛錬場へと足を向ける。

未だ漠然としたものではあるが、テレーゼにはようやく自分の進む道が見えた様な気がした。



「そう、シノブっていうのね。変わっているけど、いい響きだわ」

「……やはり、変わっているのか」

「ええ、でも変じゃないわ」

エリスと名乗った少女——直観だが、シノブはそれが偽名だと感じた——は、シノブが注文したココアを飲みながら、ニコニコと笑顔をこちらに向ける。

「それにしても、大火傷を負ったにしては随分と軽やかに動くのね。身のこなしからして、それなりに鍛えているのでしょうか?」

少女は怪訝そうな感じではなく、本当にただ思った事を口にしたのだろう。嫌みっぽくもなく、探るような様子もない純粋な問いかけだった。

もつとも、シノブからすれば背筋に嫌な汗がうつすら浮かぶ様な問いである。

出来るだけ自然に頷いてから、話をはぐらかすために適当な話題を探した。

「そちらこそ、足が動かないというのは大変だろう?」

とっさの質問にしては失礼だったかと口にしてから思ったシノブだが、少女は微笑んで答えた。

「ええ、大変よ。だけどね、私は足が動かなかったからこそ幸せなのよ？」

少女は車いすのひじ掛けに置いていた両手を広げ、まるでその場の空気を包み込むように動かす。

「私は歩くという、『当たり前』のことが出来ないわ。でもね、だからこそ！……だからこそ『当たり前』の事がどれだけ尊いか分かる事が出来たわ！」

それから少女は、指を折りながら大好きな事を数えて行く。

景色を見る事が出来る事、色んな物の香りや臭いを楽しめること、空想の世界に浸れる事、誰かを好きになって、好かれて、そしてその逆の事で頭を悩ましたりする事、美味しい物に舌包みを打つ事。

(……確かに、共感できる。だけど……)

あの日、自分の『当たり前』が消え去った日。そして、その当たり前に戻ってこれたあの朝、自分は間違いなく幸せだった。

当たり前前の朝食、家族、そして学校。

規模は違う。自分は一日立てばまた『当たり前』の中に戻っていきけるが、この少女はそうではない。ずっと抱えて生きて行かなくてはならないのだ。当たり前前ではない自分を。

強い、と素直に思う。だがそれを口にして彼女に聞かせる事は出来ない。きっとそれは、当たり前前を大事にする彼女にとつては侮蔑に等しいだろう。頑張ったというのも違う。

どういう言葉を送ろうか悩んでいると、少女はクスクスと笑いだした。

「貴方は本当にいい人ね。私の言葉の意味を分かってくれている。だから簡単でありがち言葉なんて出さない。出せない。一生懸命、なんて書くこうか——なんて口を開こうか考えてくれているのが伝わって来るわ」

やっぱり、自分の見る目は正しかったわ。と誇らしげに胸を張る少女に、シノブはフードの中で苦笑を浮かべる。

違うのだ。自分が本当に感じていたのは彼女へ送る言葉等ではなく、——恐らく羞恥心だ。

自分が声を出せず、顔が焼けただれていると思っっている彼女への申し訳なき。そして彼女の『当たり前』に対しての感じ方の強さを、この夢の世界をなんとなく生きようとしている自分と比べてしまった。(あの日の朝食の美味さは覚えている、忘れるはずがない。けど、あの美味さを理解していたと胸を張って言えるか……?)

やはり羞恥心だ。

喉元過ぎれば熱さを忘れると言う言葉があるが、まさにその通りだった。

熱かったという事だけを覚えていても仕方がない。なぜ、あの時自分はあるなにも感動したのか。

溜まった唾を飲み込む。なんとなく、あの時奥歯ですりつぶす度に滲みでた独特の臭さと酸味がした気がする。

自分は——シノブという男は、この夢の世界で一体何をしたと言えるのか。

シノブがそんな事を考えている間に、いつの間にか少女は車イスの向きを窓の方へと向けて、クスクス笑いながら外へと目を向ける。

少し日が降りて来たのか、日差しが弱まった様な気がする。

「なにか悩んでいるのかしら? いえ、先が見えないのかしら?」

少女は呟くようにそう口にした。

その通りだ。シノブはここにきてようやく、自分がこの夢の中でただ生き残る事だけが当たり前になっていた事に気がついた。

この夢を楽しもうとした。それはいい。だから自分を鍛えたし、現実世界でも時間さえあれば役に立ちそうな知識を拾い集めた。

だけど、結局自分はこの夢の世界で具体的に何をしたいのだろうか。旅がしたいのか、この世界を見て回りたいのか——それともやはり、ただ生き延びたいだけなのか……。

この剣を届ける事も、ただなんとなく決めた事だ。棒を倒して、倒れた方向に向かう様な気楽さで決め、そして状況に流されてここまで来ている。

いつの間にか、考える事を放棄していた。

「きつと、アナタは難しく考えすぎてしまう人なのね」

少女は、どこか呆れた様な口調でそう言った。

「別にいいじゃない。だって、貴女は旅人さんでしょう？　なら、生き方が決まってもいいじゃない」

少女は、その長い金の髪を指でクルクルいじりながら微笑む。

「旅人さんは——いえ、人は自由に歩いていけばそれでいいのよ。そうでしょ？」



(人は自由に歩いていけばいい、か……)

店主以外誰もいなくなった宿屋の隅のテーブルで、シノブは一人グラスを傾けていた。

独特の甘みと、鼻から抜けていくアルコールが心地よい。

いつも飲んでいる安酒ではなく、少し高めの酒をボトルで注文した。なんだか少し、酔いたい気持ちだった。

ちょうどあの後、少女の迎えがこの宿に来た。180後半はありそうな長身の女だ。何か長い物が入った袋を背負った彼女は、少女を見て「ここにいたのか。探したんだぞ」と、少し咎めるような口調でそう言った。

「あくあ、お迎えが来ちゃった。ふふ……、今日は楽しかったわ。ありがとうシノブ。また会いましょう？」

少女は大して悪びれもせず彼女に向けて適当な謝罪の言葉を口にすると、車いすの車輪を廻して彼女の元と行き、自分に再度手を振ってから女性と共に姿を消していったのだ。

(当たり前前、か。俺がこの世界で、どれだけ当たり前じゃない存在か教えてやるのも面白かったかな)

馬鹿な事を言っているな、と、苦笑しながら、もう一口ラムを含み、

舌で転がしてから流し込む。

なんとなくだが、シノブには少女が、自身の事をどこかでシノブに当てはめているのではないかと思った。一体なにを、なぜなのかは分からないが……。

(自由なんてどこにもない。この世界でもしがらみはあるし、秩序もある)

それが当たり前の事である。

だからシノブは顔を隠し、声を出来るだけ出さず、これまで世捨て人のような生活をこの世界で続けてきた。自分はどう転がっても、この世界ではまっとうではない存在だと理解しているからだ。

確かに秩序なんてものほとんど無視してきたし、時には泥棒まがいの事もして生きてきた。

だが——いやだからこそというべきか、自由を感じたこと等ほとんどなかった。

自分が生きるために、誰かを殺す、何かを盗む、奪う……それらの行為をするたびに、自分の背中に重しが乗せられていくのを感じていた。

夢が覚め、元の世界での生活に戻れば、それはさらに重くなっている。

(……そういや、スレイの奴、中々帰ってこないな。話が長引いてんのか?)

ふと、なぜここまでスレイに付いてきたのかを考えてみた。

実際には考える程もなかった。あの関所を越えたあたりから何度も考え、そしてその度に出る答えは同じだった。

(結局、寂しかったのか……)

一日立てば元の生活に戻れる。

目を覚ませば父がいて、母がいて、弟がいる。学校にいけば馬鹿ばっかりやってきた友達がい——でも、こちらには誰もいなかった。

今でも安請け合ひしてここまで着いてきたのが良かったのか悩んでいる。だが、もし時間を巻き戻す事が出来たとしても、きっと自分

はあのまま関所を越えてこの街へと来てしまおうだろう。

誰とも話さずに一日を終え——もしくは誰かに罵声を浴びせ、あるいは浴びせられてから、この夢から覚めて誰かと話すことで自分が孤独ではない事を確認するのが日課になっていた。

あの当たり前の日常こそが夢ではないかという恐怖を抱えながら。

いや、そもそもこの夢は——

(……分かってる、分かってるんだ。いや、とつくの昔に分かっていたんだ。この夢が夢じゃないってのは……)

シノブは、少しマントをずらして自分の腕を覗き見る。たまたま出くわしてしまった盗賊から受けた始めての剣撃の跡が真っ直ぐそこには走っている。——現実世界の腕にはミミズ腫れとして残っている跡だ。

「ままならないな……」

思わず、もはや口癖になりつつある言葉を呟く。今日はよく喋る。迂闊だとは思ったが、いまさらだ。バーテンダーには散々聞かせてしまっている。

グラスに残った酒を飲み干し、注ぎ足す。

自由に歩いていけばいい。

彼女が最後に言った言葉。きっと彼女が一番言いたかった事だ。つまり——

(俺が自由じゃない。俺が縛られている。唯一の男だつてのを差し引いても『当たり前』の話だ。なんてことない……)

いい感じに酔いが回ってきたのか、思考が堂々巡りへと入りだす。

この一杯を飲んだら何か腹に入れようと、六杯目になる酒に口を付けた時、後ろの方からドアに取り付けられたベルの軽やかな音が鳴り響く。それと共に、少々冷えた空気が入り込んできた。

「なんだ、もう帰って……ん？ もう大分飲んでいるのか」

振り返ると、この一週間で見慣れたアッシュブロンドの髪が目に入った。

スレイ。色々と警戒はしているし、向こうもしているだろうが、それでも唯一友人といえる——言いたいだけかもしれないが——少女

に、シノブはグラスを軽く掲げて出迎えた。

「まったく。前々から思っていたが、飲食の類に関してはお前は中々意地が張っているな。というか、金はあるだろうか？ たまにはもつと良い酒でも飲めばいいのに、お前はまた一番安いラムか」

「そう言いながら自分の隣に座るスレイ。シノブはすぐに、
「ラムが好きなんだ。ついでにいうなら一番安いのじゃなく、いつもよりいいボトルだ」

と返す。この女には、筆談の必要も全く感じない。

少し不機嫌さを込めていた言葉を聞いたスレイは、困った子供をあやす時の様な笑みを浮かべる。なんとなくだが、舐められている気がする。

「まあいい。私にも一杯もらえるか？」

「おかしい。本来なら自分の方が年上のはずなのに、なぜ彼女の方が年上の様に感じるのか。」

（よく分からんが……腹立たしいな）

ふてくされたような気分になりながら、シノブは飲み干したグラスを高く上げる。恐らく、これで気がつくだろう。

果たして、空のグラスを一つどころか二つ持ってきてくれたマスターにそれまでのグラスを交換するように渡し、受け取った二つのグラスに酒を注ぐ。

その様子を眺めるスレイの機嫌は妙にいい。やはり彼女は良く分からない。

「では……そうだな。シノブとの出会いを祝って——」

「……………」

彼女は少し高くグラスを掲げ、こちらに向けて傾ける。

深いため息を吐きたいのを必死に抑えてシノブもグラスをその高さに合わせて近づけた。

「乾杯」

「……………乾杯」

最近では良く開く口を開くのと同時に、互いのグラスを軽く合わせる。

シノブはフードの中でやれやれといったような顔を浮かべ、スレイはますます上機嫌になっている。

軽い鈴の様なグラスの音が、静かに宿屋の食堂に響き渡った。



「いきなり姿を隠せなどというから何かと思えば……よく、あんなあからさまに怪しい人間に声をかけようと思ったな」

シオンは本気で呆れながら少女に苦言を呈した。目の前で車イスにちよこんと座る少女に気まぐれな所があるのは知っていたが、こうも唐突に動くとは思っていなかった。

「そんなにあの女が気に入ったのかい？ シノブだったか」

少女はクスクスと笑い、背もたれに身体を預けるようにして舌からシオンを覗きこむ。

「ええ、気に入ったわ。まさか、この街であんな掘り出し物を見つけたとは思わなかった。惜しいわね。もし彼女がもう少し経験を積んで、自分の鎖に気付いていたのならば、何をしてでも彼女を手に入れたのに……」

「おや……。それはそれは——」

珍しい。とシオンは思った。確かにこの少女は人を見る目に長い。才にしろ性格にしろ、ズバリ言い当ててしまうのだ。この子が気にかけてた人物というのは、その全てにおいて素晴らしいポテンシャルやスキルを持っていた。

そして相手の分析にも長けている。

それなりに修羅場をくぐり抜けたシオンだからこそ分かる。この少女が本気になれば、大体の人間は彼女の手のひらで踊る事になるだろうと確信している。

口に出した事はないが、シオンはこの少女は人の皮を被った化け物なのではないかとたまに本気で思う事がある。

その少女が、ここまで気に入る相手。

先ほどはほんの少し観察するだけに止めておいたが……。

「身体の鍛え方は上の下。いや、中の上。身のこなし方からみて、それなりに修羅場はくぐっているみたいだが……」

だが、それだけだ。シオンの眼には、精々が兵士の中での強者程度の者にしか見えなかった。

だというのに、この少女は先ほどからあの『世界で最も純粋な笑み』は絶やささない。

こんなにも嬉しそうな少女を見るのは久しぶりだった。

一体、あのシノブという女のどこがそんなに気に入ったのか尋ねようとする。だが――

「シオン、予定を早めるわ。すぐに準備して頂戴」

「なに？ 完璧を求めるのならそう少し待った方が――」

「いいえ、今よ」

反論するシオンに、少女はピシヤリと言い切った。

予定。あの不感症の馬鹿共が一行に計画を進ませない事にイラついた少女が、裏でこっそり工作を進めていた計画の事だ。

すでに基礎工作は済んでおり、やろうと思えばいつでも事を起こす事は出来るが、完全ではない。

だと言うのに、自分の計画に関しては完璧主義な所がある少女は強行を宣言する。

「今、このタイミングで事を起こすことに意味があるわ」

「……理由を聞いても？」

――傭兵。戦う事が仕事の彼女からしてみれば、自らわざわざ勝率を減らすこと等考えられなかった。

思わずといった様子で尋ねたシオンの言葉に、少女は軽く返す。

「ただの好奇心よ」

「好奇心？」

「ええ、見てみたいのよ。だだっ広い野原にポツンと蒔かれた種がど

う咲くのか。いったいどんな花になるのかしら?」

「蒔かれた?」

シオンの頭に浮かんだのは、先ほど少女が興味を持ったシノブという女の事だ。

しかし、言葉の意味は分からなかった。蒔かれた? 少女にはなく? では、誰に?

少女は、こちらが怪訝そうな顔をしているのを面白がっていた。やはり、性格は最悪だ。

恐らく、自分の顔が少し不機嫌な物へと変わったのだろう。少女は車いすを押す自分の手にそっと自分の手を乗せた。

「シノブは、私に少しだけ同情したけどそれだけだったわ。どここのクロイツで産まれたかも聞かなかったし素姓も聞かず……そして、私を見下しもしなければ、敵意も悪意も害意も持たなかったわ。分かる、シオン?」

「……………なるほど」

クロイツの誤作動によってどこかが変わった形で産まれてしまった子供は、縁起が悪い物として捨てられたり、殺されたりする者が多い。特に平民にとっては食いぶちの問題もある。

最近名前が売れて来ている『隻腕』も、もし産まれてきたのが平民の家だったら、今頃死んでいるか、特殊な趣味の持ち主の所に売り飛ばされているかのどちらかだったろう。

そして、仮に殺されず成長していったとしても、そういった者は大抵が上流階級の人間というのもあって好奇と侮蔑の視線に晒され続ける。

中には『親が不徳だったからこのような女が産まれたのだ』などと、政敵を貶す材料として使われる事もあるらしい。

あの隻腕の剣士の場合にはリアフィード家の名に救われた所が多い。異常を持って産まれた者と対等に接しようとする。そのような者は中々存在しないのだ。

例え、その異常を持って産まれてくる者が年々増えていても、だ。「いったいどこから来たのかしら? 私のような人が珍しくないのかし

ら？ 案外、シノブの住んでいた所では私の様な存在がごく普通に認められていたのかもしれないわね」

シオンは思う。それは間違いなく楽園だろう、と。足が動かずとも、身体が不自由だろうと、親に捨てられることなく育ててもらえる。その土地が考えられないほどに豊かでなければ出来ない事だ。

「彼女の住んでいた土地は、理想郷のような場所だったのかな」

「さあ、それはどうかしら？」

思わず口にした呟きを、少女は皮肉気に否定する。

「どれだけ豊かになろうと、どれだけ優しい人がいようと特に変わらなんてないわ」

豊かな場所には、それまでなかった火種が産まれるものである。

この西部に、今まさに大火を点けようとしている者達のように。

「例えそこが本当に楽園だったとして、だから何？」

少女は嗤う。まるで目に焼きつくようなニヤニヤ笑いを浮かべて。

「そこに住むのは人間よ。本当にそこが楽園だろうと、地獄だろうと何も変わらない。たとえどれだけ離れていようと、それこそ違う世界だろうと——」

「人の欲望に、変わりなんてあるはずがないわ!!!」

きつと、今にも大声で笑い出したいのを堪えているのだろう。ニヤニヤ嗤いを浮かべて肩を振るわせている少女は、呟くように一言付け加えた。

——それが当たり前の事よ。ねえ……シノブ？

『』と『剣士』

『向こう側』では比較的陽気な季節だが、こちら側ではまだまだ寒い冬の真ただ中である。

学校が終わってから駅近くの図書館に立ち寄っていた俺は、いつも通りの席に荷物を置いて一息。窓の外には暗くなり始めて灯りが付きだした街の姿が透けて見える。

「宿題は休憩時間で終わってるし、こつちに専念するか……」

机の上に置いた鞆から、一冊のノートを取り出す。

その一冊は、鞆の中に入っている授業用のノートのそれよりもかなり使い古した、四隅が少し丸くなっているノートだ。

もはや定位置となっているこの席に来る前に取ってきた本——アウトドア等の技術や料理などと言った、サバイバルに役立つような物を、そのノートの隣に置く。

放課後に図書館に寄り、宿題を終えたら時間ギリギリまでこのノートに役立ちそうな物をまとめながら書き込んでいくのはもはや日課である。

(もつとも、今回は——)

今日チョイスした本は、いつものアウトドア系の本もあるが、一番は歴史関係の書籍。正確には、外交関係の流れを詳しく書いてある書籍を選んだ。

(スレイが余計な仕事を持つてくるから——ちくしようめ)

やはりというかなんというか、スレイは妙に俺をあつ街に留めておきたらしい。宿代を追加で払ってまで俺の活動拠点を確保し続けた。

さすがにお金を払ってもらい続けるのは悪いし、なにより刀も返した事だしそろそろここを立ち去ろうとしていたためにやんわりと断つたのだが、結局は彼女の勢いに負けて、彼女が持ちこんできた仕事をこなす日々を送っている。

少し口出ししたり、数を数えるだけの簡単な仕事だとはスレイの言だが、彼女の持ちこんできた書類の数々はどう見ても少しの口出しで

済むものではない。

ここ数カ月の旧開拓民や先住民による暴動まがいのトラブルの発生した時期と場所をまとめた資料、賊の目撃情報の統計、商人からの嘆願書など……。どう考えても怪しい不審者に見せつけるものではない。

おまけにそれらについての対応策を挙げて書いておいてくれ等と言われる始末。一体何度、スレイの頭を叩き割って中身を覗いてみたいと感じた事か。

仕事というか、今頼まれているのはそういった資料を更にわかりやすくまとめたり、あるいは自分なりに分析して気になった点を書き連ねて報告書をあげたり……そう言う事をやっている。

一応、そういった本を読んだり、ネットで色々調べたりしているが所詮は付け焼刃。スレイ曰く、領主のハウゼン卿からお褒めの言葉を預かっているそうだが、リップサービスで間違いないだろう。

(……これからどうするかね、俺)

正直な話、刀を持ち主の所に返そうとしたのも特に理由があるわけではなく、なんとなくというのが大きい。仮にあったとすれば、貴族の後を追って行く事で大きな街の近くにちょうどいい拠点が見つかるのではないだろうかという打算だ。信用を得る事で多少なりともこの身が保障されるのではないかというのもあった。

(——明日というか今日というか今夜というか……なんにせよ、スレイはしばらくの間仕事が溜まっていて城に泊まるらしいけど……)

今の仕事にキリがいたら、真面目に彼女とは一度話しておくべきだろう。

どこかに拠点は欲しいとは確かに思っていたが、あの場所は華やか過ぎる。

そもそも、以前に俺を追いかけて回した女の足元で過ごすなんて絶対にヤバイ。間違いなくヤバイ。

一年前くらいの出来事になるが、まだ声を覚えられている可能性も十分にある。

「……ままならねえ」



小雨が舞い降りる街の中を、一人の女がぶら付いていた。

首のあたりで切った美しいアッシュブロンドには、小雨が張り付き、まるでダイヤモンドの欠片を塗ったかのように煌めいている。そして、その腰にはロングソードを一回り以上短くしたような変わった剣が刺さっていた。女——テレーゼは、久しぶりにあった妹に、やはりいつまでも追いつけないのではないかという不安感を胸に抱いていた。「いつの間に……いつの間にそんな者を……」

ハウゼン家の応接間で、およそ二年ぶりに再会した妹は、相も変わらず美しかった。家にいた頃から人一倍お洒落や化粧品には気を使っていた事は知っているし、そもその素材が最高なのだ。

これで、未だに一人も恋人を作った事が無いというのだから驚きだ。

今回の作戦に参加する事でようやく一步前に進めた気がしたテレーゼは、多少なりとも胸を張って妹と向き合えるのではないかと、そう思っていた。

今、幹部達が勢ぞろいしているこの会議が終われば話しかけてみよう。

会議の内容は、近年多発している暴動一歩手前の騒動。旧開拓民や原住民との衝突に関してであった。

どのような時期に集中しているのか、どのような場所で発生しているのかそれらを踏まえた上で、住民たちを刺激する事を避けるために、軍の行動に制限が出来てしまっている事。

先日、一度聞かされた内容の再確認といっても良い。とはいえ、より細かい情報となっていたために、事態がかなり切迫している事がいやでも強調されている。

それらを、今度の従軍で自分の指揮官となる赤毛の騎士——ベルヌーイができるだけ簡潔に述べると、今度はハウゼン卿が口を開いた。

『さて、これらの報告を聞いて皆はどう思う?』

テレゼには答えられなかった。

今回の従軍でベルヌーイ将軍が率いる一隊に着いていけばいいというのは、キュベレから聞いていた。が、詳しい内容は聞かされていなかったのだ。

昨日話を聞いた時には警備の増強かとも思ったが、軍や警備隊が住民に与えるだろう刺激と引き起こされかねないという事態が自分の想像をはるかに超えていた。

恥ずかしい話、指示の元、与えられた任務——敵を倒していけばそれでいいとすら思っていた。

このような一触即発の状況では迂闊に軍は動かせない。

仮に自分が上の立場に立てば、どのように動けばいいのかテレゼには分からなくなっていた。

『ふむ……では、スレイリアアフィード。貴女はどう思う? 気付いた事があればどのような事でも構わない。述べてみなさい』
そこでスレイが名指しされた。

スレイは即座に敬礼して返礼を口にし、

『これらの暴動は偶発的に起こった物ではなく、何者かが意図的に計画して行った可能性が高いと思われまます。それも帝国をよく知る者。おそらく旧開拓民や原住民達は利用されているだけでしよう』

妹は、何も恐れずにハッキリとそう答えた。

ハウゼン卿が促すと、スレイは更に言葉を続ける。

全ての騒動が主要な交易路や運送路、あるいはそれに連なる町や村に集中している点。

それらの時期が収穫期、あるいは大きな交易がある時の前後に集中

している点。

そして、それらの全てがことごとくハウゼン卿が進める融和政策にとって重要な拠点、あるいは政策のための行動を阻害するかのように行われている、と。

それにハウゼン卿は微笑んで答えた。ただの笑みではない、威嚇を兼ねた笑みだ。

『その通りよ。どこかの愚者が、この私に政争を……いえ、戦争を仕掛けてきている。それが今の西部よ』

——戦争。

思いもしなかった言葉だ。事が起きたとして、精々が現状に不満をもつ旧開拓民や原住民達の一斉蜂起による内乱。それも、今のハウゼン卿の融和政策で不満を持つ者は少なくなっているはずだ。数もそれほど多くはならないだろうと、レーゼは高を括っていた。

武者震い——と信じたい——に身体を震わせながら、言葉の続きを待っているとハウゼン卿は、

『でも、それだけじゃないでしょう。他にもなにか言いたい事があるのではなくて?』

そう言つて再びスレイに向き合うのだ。

スレイはなぜか一瞬こちらを一瞥し、そして、自信がないのかためらいながら、答えた。

『もしそうならば、いくつか統制とは言い難いズレの様な物を感じます』

そう言つてスレイは、いくつかの暴動が起こった場所を指し示す。自分には分からなかったが、戦略的にそれほど価値がない場所らしい。

『一人、ないしは二人ほど指揮する物がいて、後はまとまりのない集団である可能性が考えられるかと。現状のままならば、相手に餌を見せつけ混乱を煽つてやれば、集団内での発言力を求め合い、内側からバラバラに崩壊すると思われれます』

静かに、ざわめきが起った。

スレイは自分が口にした事が分かっているのだろうか。仮にも未

だ騎士はおろか兵士としても認識されていない士官学校卒業を卒業しただけの女が、促されたとはいえ『戦術』を提案するなど、古くから仕える由緒ある騎士や貴族ならば不敬と訴えられてもおかしくない行動だ。

確かに今の帝国ではそういった発言はむしろ奨励されているが、あまり多くても駄目なのだ。それでは指揮側の思考を混乱させる可能性がある。

卑怯な言い方ではあるが、そこは発言を促されても『いえ、ありません』と断わるべきなのが『暗黙の了解』というものだった。

事実、ベテランと言える騎士の何人かは、スレイを非難する様な目で睨んでいる。

だが、ハウゼン卿はその言葉に目を丸くしてパチクリさせた後、大きな口を開けて笑いだした。

將軍もキュベレも、その様子にまた驚いている。ひよつとしたら、このように笑う事は滅多にないのかもしれない。

『——ふう。……ああ、久しぶりに笑わせてもらったわ。そして驚いた。ええ、驚いたわ、スレイ||リアフィード。……そうよ、私もそう考えている』

一体、どのような思考を持ってスレイはそのような考えにたどり着いたのか。

ハウゼン卿が口を開いた時、テレゼはそれを聞くのだろうと思っていた。

だが、出てきた言葉は——

『だけど、最初のモノはともかく……後の戦術は貴方の考えじゃないわね?』

『……はい』

スレイは、少し俯きながら答えた。まるでカニンクが見つかって教官に叱られているようだが、姉であるレーゼには違う様に見えた。

確かだと胸を張っては言えないが……なんだか、少し自慢げだったように見えたのだ。

『貴女の従者かしら? あの黒衣の』

妹につき従う、黒衣の従者。そのような存在、レーゼは耳にした事が無かった。

『はい。従者ではありませんが……友です』

『友……なるほど。仕組まれた暴動である事もその者は見抜いていたのね?』

『……自信はないようでしたが』

『自信があろうがなかろうか、その可能性を見つけたのは事実。興味深いわね……スレイリアフィード。その者、今度連れてくる事は出来なにかしら?』

これに目を剥いたのはキュベレや他の武官、文官達だった。

必死に『おやめ下さい!』だの『リアフィード家の者ならばともかく、素姓の知れぬものをここに招くなど……っ!』などといって全員が反対していた。

ただ一人ベルヌーイ將軍だけが賛成も反対もせず、じつとしていた。

結局スレイ自身が、その友が大火にその身を焼かれ、顔が見せられず声も出せないという事を理由に人目に引き出す事を断わり、その場は治まったが……。

(私が放浪している間に、妹はハウゼン卿が興味を引くような者を見つけて出していたのか……。当たり前だ。一体この二年で、私が何をしていたと言うんだ。むしろ――)

むしろ、祝福してやるべきなのだ。優秀な妹の元に、有能と思われ
る者が友としていてくれるのだ。

聞けば、自分が捨てたあの剣を拾って、わざわざ届けるためにここまで来てくれたと言う。もしそれが本当ならば、信じられないくらいのお人よしだ。そのような者が妹を裏切ることはないだろう。

本当にお人よしすぎて、中々信じられないが……。

(だが、あの剣を再び目にする事が出来たのは事実だ)

会議が終わるやいなや、逃げるようにハウゼン邸を後にし、兵士共

用の宿舎へと戻った。

一度妹と話し合うつもりだったのだが、今は会いたくなかった。この二年の間についてしまった自分とスレイの差から目を逸らしたかった。

部屋に戻り、先日購入した剣。気がつけば、かつて手にしていたあの二振りの剣と酷似した物を買っていた。それを手入れし、磨きながら心を落ちつけていた時に——あの剣が戻ってきた。

『姉上……』

部屋をノックされて扉を開けば、妹がそこに立っていた。ベルヌーイ將軍からこの場所だと聞いたらしい。そしてその一つしかない腕には、あの日自分が投げ捨てた剣が抱えられていた。

『さつき、少し話に出たでしょう？ シノブという変わった旅人と知り合ったのだけど……これを拾って、わざわざ西部にまで届けに来てくれたのです』

先ほどの会議の中で、話に出てきたスレイの関係者など一人しかない。

あの『知の女傑』リディアⅡハウゼンの興味を引き、そして妹がどこか誇らしげに口にしていた友——『黒衣の従者』。

こんなにも胸がもやもやしたのは久しぶりだった。

『姉上……姉さん、もう一度この剣を握ってはもらえないでしょうか？ この剣も、きつと姉さんに振るわれたがって——』

その言葉を聞いた時、気がつけば口を開いていた。

『もう……その剣は捨てたんだ……』

本当は無性に大きな声で叫びたかった。

放っておいてくれと。私の事など忘れて先に——前へと進んでくれと。

不甲斐ない過去と一度決別し、新たな一步を踏み出すつもりだった所に、自分の過去を象徴するものを突きつけられて心がささくれ立っていたというのもある。

なにより、余りにも滑稽な自分の姿が情けなかった。

気がつけば、その剣をスレイに押し付けていた。お前が受け取って

くれ、と言って。

毎日の報告会議で顔こそ合わせているが、終わればサツと帰ってしまっていた。

スレイもこちらの感情を察してくれたのか、軽く会釈を交わすだけに接触を留めてくれている。

(本当に……できた妹だ。私と違って……)

放っておけば、どんどん悪い方向に陥ってしまいそうだった。同室にいる傭兵からは酔狂だと笑われるだろうが、こうして雨具も身につけずに街を歩き回っているのはそうした思考を切り替えるためだった。

雨は好きだ。子供のころからずっとそうだった。

当時はまだ稽古が苦手で、外で身体を動かすよりも家の中で本を読むのが好きだった。

スレイが言葉を話すようになってからは、彼女が好んだ騎士物語をよく妹に読み聞かせていたものだ。

ふと、その時の事を思い出して笑みが零れる。そしてそれに気付いてテレーゼは安堵の息を吐いた。

なんだかねで、私は妹の事が好きなのだ、と。

もし、ここで心の底から嫉妬と憎しみが溢れていたのなら、こそテレーゼという女はどん底まで堕ちていたかもしれないと、彼女は確信していた。

息継ぎをするように深く息を吸い込む。ただし慌ててではなく、雨に濡れた煉瓦や木材の香りを楽しむように、ゆっくりとだ。

(……少し、どこかの店で飲むか)

店のバーテンダーでいい。誰かに、色々と胸の内をぶちまけたかった。

ふと、ある宿屋が目に入る。飲み屋を兼ねた店だ。

ここしばらく自分が飲んでるような汚い店とは程遠い。

少し二の足を踏むが、一拍置いて、扉を開ける。

そしてテレーゼは、『黒』に出会った。

『コンビ』

この世界唯一の男が『起きた』時、辺りは雨音に包まれていた。
(雨……か)

シノブは一階のバーに降りて、また注文したラムが入ったグラスに口を付けながら、窓の外の光景を眺めていた。

昔から雨が嫌だった。嫌いではなく、嫌なのだ。理由は単純で外で遊べなくなるから。

正確には特訓といった方がいいかもしれない。鬼ごっこやドッジボール、サッカーやバドミントン。これらで得意な物が一つはないと、『男の子』という物は集団の輪から外れやすくなってしまふのだ。それほど運動が得意という訳ではなかったシノブは、父親に必死でキャッチボールの練習を頼んだ事が合った。——どちらかといえば、投げるより飛んでくるボールを怖がらない練習だった気がするが——今にして思えばなんてことはないし、父も自分が余りに必死すぎたために苦笑いしていたが、当時のシノブからすればそれこそ必死だった。

(あれもしがらみっちゃしがらみか)

だからシノブは雨が嫌だった。雨が一日降る度に、学校で人気のある子達から一日分遠ざかる様な気がして……。

では、雨が嫌いだったのかというところではない。雨が降った日は、そのような恐怖心を抱えながらも、自分の好きなゲームや漫画に打ちこんでいた。

なにより、いつも出かけていた弟が隣にいた。

弟は水泳部のエースだ。幼い時から泳ぐのが好きで、近所の子供達の中で一番夏を楽しむにしていた男の子は恐らく弟だろう。

本当に幼いときは、市民プールや学校のプールに毎日のように出かけていた。

自分もそれに着いていった事があるのだが、弟はプールを楽しむのではなくより早く泳ぐ事——つまりは自分を鍛える事を楽しんでいた。それが分かってから、いつしか弟と一緒にプールには行かなく

なっていました。

そこから少しだけ、雨の日は好きになった。プールに行けない弟とゲームをしたり、一緒に宿題をやったり出来た。次第にそんな機会も無くなり、やはり雨は嫌いになったが……。

(……羨ましかったな)

始めは運動が得意という事に、次に好きな事、打ちこめる何かを持つている事に。

少しぬるくなったラムを飲み干し、鼻から抜けるアルコールを楽しむ。

今のシノブの好きな事は、燻製を作る時の独特の燻煙、酒、茶、そういうった香りを楽しむことだった。

もつと言えば、何かを楽しむことが出来る自分が好きだった。まるで、自分も弟みたいになんかを持つ事が出来たようで、誇らしかった。

だからだろうか、旅の邪魔になることもあつて香り——臭いを阻害する雨というものがいやになった。

——嗅覚の聴覚が阻害されると敵や獲物を感じ取れず、うかつに動けなくなるという世知辛い理由もあつたが、しかし——

(こういうのも悪くない)

蛍光灯の様な便利な物がないこの世界では、陰っただけで一氣に薄暗くなる。

店を構える様な者たちは、そうなると仄かに明るい昼からだろうとすぐにランプや蝋燭に火を灯す。明るくなければ人が入らないからだ。この宿屋も例外ではない。

ランプの中の炎が揺らめき、それが作り出す影も揺れる。

シノブが好きで読みふけた数々の物語。その中でもお気に入り、ハードボイルドな世界がそこにあつた。

(少々……いやだいなぶ不純な気持ちだけ)

こういうのに憧れる自分は、やはり男の子なのだと再認識する。

こういう楽しみがあるのならば、雨もそうそう捨てた物じゃない。

マスターがお好みでと付けてくれたシナモンスティックを啜え、やはり香りを楽しむ。

(ただ、それには旅をやめなくちゃならないんだよね……)
自分が男で在る以上、この世界でどこかに定住するのは難しいだろう。

いつその事、バラしても上手くいくのではないかと考えた事もあったが、何が起るか想像できないために結局止めていた。

「……スレイに養われるか?」

冗談めかして口にしてみるが……なんというか、あり得る未来過ぎて恐ろしすぎる。洒落にならない。

(もつとこう、旅慣れてこつちの事情を早々明かしたりしなさそうな女がいればいいんだけど)

あるいは、いつその事自分以外の男を探し求めるのもありかもしれない。

話を聞く限り、少なくとも大昔にはいたはず。

「……クロイツを調べてみるか」

この世界で子供を作る唯一の方法。ある意味で男の代わりだ。ど
ういう理屈かは分からないが……。

——ギイイイイツ

ゆつくりと、扉が開く。外は雨だ。

雨宿りだろうか? そう思い、首を僅かにそちらに向けると、見な
れた銀色が目に飛び込む。

「スレイか? 今日は向こうに泊るって……」

が、明らかにその銀色は短かった。首に少しかかるくらいの長さ。
その長さは、覚えている。自分がここに来る切っ掛けになった……

「……お前が、スレイの従者、か?」

あの時、後ろ姿しか見なかった女剣士が、茫然とした様子で自分を
じっと見ていた。



「そうか、私が剣を捨てたあの橋で……」

「後一步踏み出していたら、今頃あの橋の下で永眠していたかもな」

「はっはっ！ いや、すまん、悪かった。ほら、一杯奢ってやるから機嫌を治せ」

「別に、そんなんじゃない」

スレイの姉——テレーゼは、扉をくぐってからしばらくぼうっと立っただけだ。俺を見つめるだけだった。

バーテンダーが、ずぶ濡れの彼女にタオルを渡してようやく反応らしい反応を見せたので、なんとなく隣に誘ってみる。

結論から言えば、正解だった。思った以上に話しやすい相手だ。

スレイに連れてこられて、気が付いたらここにいるという話をした辺りから、少し肩の力が抜けたような気がする。

最も、少しは少し。まだ微妙に焦りというか、無理矢理合わせているような雰囲気を感じている。

「しかし、わざわざ剣を返しに来るとはな。売り払っても構わなかったんだが……」

何かのタイミングがずれていれば、実際そうなっていた可能性はあった。

あるいは、片方を売って、片方は使わせてもらっていたか……。

「テレーゼ——」

「レーゼでいい。親しい者はそう呼ぶ」

「……」

やはり、焦りを感じる。なんだろう、早く仲を縮めておきたいといったような感じ。

悪意ではない。そういう物は感じないのだが……。

「分かった、レーゼ。スレイから聞いた話だと、この城下町は今警備を強くしているということだが……住民の様子はどうか？」

「スレイから話を聞いているのでは？」

「アイツの視点は上からだ。そうでなくても、視点は複数欲しい」

そう言うと、なぜか嬉しそうに『そうか』と呟き、グラスに残った酒をぐつと飲み干す。

「とはいえ、な。ハウゼン卿はやはり有能だ。警備隊の精鋭を二手に分けて、装備を付けたまま巡回するものと、平民に紛れ込んでいる者に分けている。出来るだけ平民を刺激しないようにという配慮だろう」

「ふむ……」

なるほど、と一瞬納得しかけたが、それだけだとは思えない。

目立たない兵士の使いどころは大体相場が決まっている。気付かれないように襲うか、気付かれないように調べるかだ。——何かを。(……街中の住民に敵が紛れ込んでいると見てるか?)

もしそうなら、精鋭の半数をつぎ込むのも理解できる。同時に、ハウゼン卿がかなり現状を危険視し、警戒している事も。

「……どうした、シノブ? なにか、気になる事でも?」

「ああ、いや、気にしなくていい。……レーゼが気にするのはそこだけか?」

非常に気になるが、今からどうこうできる問題ではない。

それよりも、他の情報を仕入れるべきだろう。

「と言われてもな……。私はリアフィード家の一員ではなく、実質傭兵に近い扱いだ。彼女達との連絡役ということでは会議に参加はしているが……詳しい事は何も」

「傭兵扱い……それじゃあ指揮する人間は?」

「ベルヌーイ將軍だ」

「ベルヌーイ……ああ」

どこかで聞き覚えがある様な、と少し考えて、思い出した。あの二年前の日に、ハウゼン卿とやらが叫び、呼び寄せた槍騎士の名前だ。

飢えとは違う恐怖をシノブに刻みつけた人物とも言える。

何せ、殺気という物がどのようなものか、身を持って教えてくれた人物だ。

「……あの人があ」

せつかくだし、レーゼとの距離を縮めるついでに現場を見ておこう

かと思ったが、あの女がいるのなら近づくのは危険。

なお、レーゼと距離を縮めようと思ったのは、運が良ければあの刀を片方だけでももらえないかという下心だ。

ついでに言えば、スレイの事もあるから、もういつその事リアフリード家とは良い仲になっておきたい。

スレイの元に留まるつもりはないが、こうなったら少しは繋がりを作っておいた方がまだマシかもしれないという考えだ。

「なんだ？ 將軍の事が気になるのか？」

「ん？ ああ、いや、別に……」

レーゼが、少し身を乗り出して来る。

なぜだろう、その姿がスレイと被る。さすが姉妹だ。

そういえば、今レーゼが座っている席も、いつもならばスレイの座っている所だ。

「ならば、私に任せろ」

「……なに？ いや、ちょっと——」

「遠慮するな。妹が世話になった礼だ」

「——我々の駐屯地を案内してやろう」



(……何をしている、私は……)

ファルシオンを腰に下げ、渋々と言った様子で後ろを付いてくるシノブを確認しながら、レーゼは気付かれないように眉に皺をよせていた。

あの宿場で噂の従者に会った時は、本当に驚いた。今最も会いたかった女で、そして最も会いたくなかった女だった。

一体どこで妹と知り合い、そしてあの子に付き従う様になったのか気になっていた。聞いてみたかった。

(……シノブ、か。思った以上に、話しやすい女だった)

あまり口を開かないと聞いていたが、それでも聞いて理解を示しているというのは伝わってきた。

聞き上手とは、ああいう者を指すのかと少し関心してしまった。

話を聞いてくれる人間なら、ちよつとした酒場の者がいるが、それとは違う。なんとさえばいいのだろうか……上手く言葉に出来ない。

(ただ、こうして連れ回している理由は……なんとなく、わかる)

この女が、別にスレイに忠を尽くしている訳ではないと分かったからだ。

たまたま私が剣を捨てる所に出くわし、返しに来て、そしてスレイに出会った。

分かっている、自分がなぜこのシノブという女に近づきたいのか。

——妹から、奪ってしまいたいのだ。

醜い嫉妬が、自分の身を焼いている。馬鹿な事だと分かっているも、考えてしまう。

もし、この女が傍にいればと。

ハウゼン卿という聡明な女性が認める人材が、自分の手元に来てくれれば……そんな事ばかりを。

(いつからだ。いつからこんな……醜い女になってしまった……)

妹からこの女を奪った所で、暗い優越感に浸れる時間など僅かな時間だ。間違いなく、後悔する。それも、永遠に。だというのに——

——テレゼ、貴女に一体何ができるといふの？ 剣の腕はある。だがそれしかない貴女に、どのような価値が？

「……………」

頭の中に、世界でもつとも尊敬し、感謝していたはずの女性からの言葉が今も響き続けている。

母からの、冷たい視線と、言葉が。

「どうした？」

気が付いたら、足を止めていた。

不審に思ったシノブが、声をかけてくれる。

「いや、すまない。気にするな」

「……さすがに將軍の許可を得ずに駐屯地を見るのは拙いんじゃないか？」

「そんなことはないさ。お前が見ず知らずの者ならともかく、その腕輪を預けられたお前ならば問題ない」

実際、そう思う。顔こそ合わせていないが、ハウゼン卿から興味を持たれているこの女なら。スレイが信じた、この女なら。

「我々のような傭兵は、いざ事態が発生した時に真っ先に動くために、壁の外に野営地を開き寝泊まりしている。まあ、不満を溜めないように交代で街中の宿舎に戻ったりしているが」

「今日はどつちだったんだ？」

「私か？ 今日とは宿舎だ。明日が休日だったからな」

ベルヌーイ將軍の指示で、半数が今日は街中にいるはずだ。おそらく、中々活躍の場がないことに不満が溜まりそうな傭兵連中の息抜きを狙ったのだろう。

そう言うと、シノブはフードの中の口元に手を当て、なにか考えている。

「今、最も恐れているのは、この辺りの村や街の旧開拓民や原住民の一齐蜂起……で、良かったか？」

「……いや、正しくないな。正確には、その切っ掛け、火種になりそうな治安の悪化を恐れている」

そのため、発生する盗賊や暴動、凶暴化した獣などの対処が主となっている。

そういった事態が発生した際、急行できるように、將軍が馬をかなりの数用意してくれていたはずだ。

「なるほど……」

「ベルヌーイ將軍が警戒を始めてから暴動の数は減ったが、逆に盗賊が増えてな……」

「レーゼ、お前は連中と交戦を？」

シノブは、無意識にだろうか、ファルシオンの柄を撫でている。戦

いの事を考えているのだろうか。

「いや、まだだ。私は今の所、傭兵達と上をつなぐ調整役だからな」

「……中間管理か」

「そういうな。……ああ、ただ、傭兵の連中も恐らくほとんど盗賊と戦った事は無いはずだ」

「ん？」

今度は、シノブが足をとめた。

「連中は馬を使っているな。村を襲って一しきり矢を浴びせ、略奪し、そして素早く逃げていくんだ」

「……現場を見たことは？」

「それならある。幸い死傷者は少なかったが、かなり矢を浴びせられていたな」

「……………」

「気にかかることが？」

そう聞くと、シノブは『スレイから聞いていない事ばかりだ』と肩を軽くすくめて、

「矢の量は？ それと質」

「かなり多かった。質は……盗賊が良く使うそこらの枝を加工した物だ。矢じりも黒石を削った物が多い」

「……そっか」

シノブは私の答えに、少し首をかしげながらそう言う。

「気になることが？」

もう一度、聞いてみる。

「分からない。けど、質が悪くても矢の準備は大変だ」

「……どこから調達したか、か？」

「あるいは、短時間で粗雑とはいえ矢を大量に作れるほど人数が多いか」

シノブは、まるで身を守るかのように、再度ロープを手繰り寄せる。

まるで、決して誰にも姿は見せないと言いかのように。

「馬もそうだ。どこから集めたのか……」

「野生馬を集めた。そう考えていたが……」

ふと、街を見る。正確には、その一か所——商業特区。

「商人、か？」

「……ハウゼン卿ならもう気が付いていそうだが」

顔は見えない。だが、なんとなく、シノブも同じ方を向いている気がした。

「当たってみるか？」

二人の調査

傭兵達が主に活動している駐屯地は、城壁から少し離れた所であった。

すぐさま足を引き返して、商業特区に向かおうと思ったのだが、と
りあえず見れるのなら駐屯地を見ておいても悪くはないだろうと、
こちらに来ていた。

すでに雨は上がっているのだが、やはり地面はぬかるんでいる。

まあ、駐屯地の柵の向こうは全体的に石を敷き詰めているようだが
……。

(なんつーか、キャンプ場みたいな感じだな……)

スレイと共にこちらに来た時には無かったはず。本当に最近建て
られたのだろう。

木造や石造りの建物はほとんどなく、おそらく濡れると不味い飼
葉や装備などをしまっているのだろう倉庫らしきもの以外は、ほぼ全
て丈夫そうな布を何枚も重ね合わせて作ったテントだ。

「ん？ テレーゼ、お前は今日は休日じゃなかったか？」

所々にある簡単な焚き木跡の上に吊るされた鍋は中身が空っぽで、
その下には完全に炭化した薪がある。もう食事は終えたのだろう。

色々観察をしている間に人気ひとけのないテントの影から、一人の女が
出て来た。

聞いた話だと一応小隊長という身分のレーゼに普通に声をかけ
ると言う事は、この女兵士も同じ位の立場なのだろう。

「そうだ。知人がここに興味があるというので案内しに来たのだが
……この様子では出陣か？」

「ああ、なんでも賊が集まっている気配があるらしくてな。騎兵を中
心に出陣だ。あとで外の警戒に、中の兵士を回してくれるらしい」

賊が出たと聞き、テレーゼは眉をひそめるが女兵士は軽く肩をすく
めるだけだ。

「まあ、目撃例の出た所を徹底的に調べて——場合によってはその辺
りに陣を新しく作るかもって話してたよ」

「む？　この防衛はどうする」

「さあ……人員適当に割いて、向こうとこつちで交互に配備されるんじゃないか？」

二人が色々と話している間に、辺りから人が出る気配はない。——
というか、人の気配がほとんどない。

ちよつとだけ作りのしつかりした建物——感じからして、おそらく兵糧庫だろうか？　そこに守りの兵士10名程度がいるだけだ。

（マジで空っぽなのか？　仮にも一応は軍の駐屯地……ああ、でも傭兵寄せ集めた即席隊って言ってたな）

森を抜けてからの旅の間、数度だけ傭兵という存在を見たことがある。

傭兵と、名乗っている存在を。

（いやでもアイツらはほとんど盗賊だったよなあ……）

容赦なく身ぐるみ剥がそうとしたり、勝手な通行料を徴収しようとしたり、まあなんとも面倒な連中だった。

もし、彼女達が今レーゼと話している兵士くらい話の通じる相手だったら、無駄に殺す事もなかったのだが……。

「しかしそうか、コイツに少しここらを見せて回りたかったのだが……」

「別にいいんじゃないかい？　大事な物なんざここにやないし、その腕輪、リアフィード家の関係者だろう？　こんな駐屯地で何見た所で問題になるわけないさ」

「ふむ……」

レーゼはしばし一人で考え込むと、俺の方に顔を向ける。

無論、もう一人の女兵士もだ。

フードはしっかりと深く被っているし、髭もここ数日はいつも以上に念入りに剃っている。……大丈夫だよな？

（よし、商業特区行ったら、ついでに仮面探そう。なんかちよつどいい感じの奴）

頭の中で調査ついでの買い物リストを作成しながら、どうした？　つとレーゼに声をかける。

「せっかくだし、少し見て回ろう。お前も現状は気になっているのだろうか？ お前の観察眼ならば、なにかに気付くかもしれない」

「……そこまで期待されてもな」

どうにも、レーゼは俺を特別視しすぎている。

まあ、こんな腕輪を身に付けている以上仕方ないのかもしれないが……

テレゼと兵士が先行するように、倉庫周りの石が敷き詰められている道を歩く。

おそらく装備周りを扱う施設のため、ある程度整備が必要だったのだろう。

(混戦時とか、埃は意外とやっかいだもんなあ……)

利用した側ではあるが。

そうこうしている内に、倉庫らしき建物に着く。

すぐそばには、大きな横長の焚き木の跡と、その上に何かをかけていたのだろう長い棒が横に吊るされている。

臭いからして、恐らく獣皮を燻して簡易の革なめしを行っていたのだろう。装備品の応急処置用か。

「まあ、見る物自体ほとんどないけど好きに見て行きな」

「ああ、そうさせてもらおう」

倉庫の中は、ある程度の槍や盾、そして補修用の革や布の束、それらで作られた小袋などがある程度積まれている。

奥には、おそらく新調した装備等が入っていたのだろう木箱の山が積み上げられている。

(……やっぱり、数が少ないな)

兵士が結構出ていると言っていたし、ほとんどの装備は持ってかれているのだろう。

それに、傭兵連中ならば自前の武器を持ってきているだろうし、こんなものか。

「ふうん……」

レーゼと共に、倉庫の中へと一步踏み込む。そして更に二歩踏み込み――

「……………ん？」

俺とレーゼは同時に声を出し、そして同時に顔を見合わせるのだった。



「君の言うとおりにしたが……やはり危ういな。計画をかなり前倒しにする以上、どこかにしわ寄せが来ると思うが……」

長身の女——シオンは軽く伸びをしながら、車椅子の少女にそう声をかける。

「ええ、構わないわ。肝心の根っこはもう押さえているし、本命はそもそも別にあるもの」

だが、少女はシオンの懸念など瑣末な事だと言わんばかりに一言でそれを斬って捨てる。

「ハウゼン卿の動きは大体読める。どこまで行ったところで個人は個人」

どこかのやや広い、石造りのしつかりした部屋の中に彼女達はいる。

リディアⅡハウゼンの政策、あるいは彼女がここに来た事によって割を喰らった人間の密会場所——と言う名の愚痴吐き部屋である。

「ええ、彼女は優秀。とっても優秀」

少女は、本来椅子が設置されている場所にそのまま車椅子を押しこみ、その上にいつも通り腰かけていた。

「でも個人。だからこそ個人。彼女は上に立てば立つほど動きが読みやすい人間よ。手ごわいと感じるでしょうけど、それだけ。ただそれだけ。それよりも——」

少女は、お気に入りの飴を口の中で転がしている時の様な恍惚とした顔で、シオンに逆に質問する。

「シノブはどうしているのかしら??」

「ああ、彼女なら『隻腕』の姉と共に傭兵部隊の駐屯地を見て回ったよ。うだ。見張りに付けておいたニキから先ほど伝書鳩による報告があつた」

シオンは、困った顔で少女に、

「いいのか? 彼女は貴重な人材だ。それを、わざわざ女一人の見張りに使うなんて……随分と非効率的じゃないかい? こっちは無能共の兵を取り込んだばかりなんだぞ」

と釘をさす。事実、今現在彼女たちはなんとか帳尻を合わせながら計画を進めている。

「いいのよ、当てはあるわ。それに、彼女は普通ではない。それだけの価値のある女性よ」

「……まあ、リアフィードの腕章を与えられる人間である時点で稀有な人間だとは思うが……」

シオンから見て、シノブという女は興味を惹かれる所は確かに多々あるが、大勢に影響を及ぼせるほどの力を持っているようには見えなかった。

「大局を動かすには、強欲である事が不可欠だ。彼女はそれに当てはまらない様に見えるが……」

もし、あの黒尽くめの女が力を持つ資格のある人間ならば、既に城に入つて積極的に流れに介入しているはずだ。

偶然力を手にするなど、よほどの運を——天を味方にしなければ不可能だ。

金、人、武、知……およそ力と言う物は、本人がそれを強く望み、そして動かなければ手に入らない物だ。

「そうね……確かに、物事を動かすのに欲は必須」

それは少女も熟知していることだった。

なにせ、そういう強欲な人間を相手にしてきて、身体というハンディを背負いながらもねじ伏せたのが彼女だからだ。

「でも、それが本人の欲である必要があるのかしら?」

「ん?」

「彼女の周りに強い欲……美しくない言葉ね。そう——強い願いを持つ人間がいれば」

ふと、シオンは一人の女を思い浮かべた。

シノブという女をこの地へ連れてきた、若き剣士。未来の将。——

『隻腕』スレイリアフィード。

「そしてシノブが——どこか違う物の捕らえ方をする彼女が、その誰かに力を貸そうと心から願えば……」

まるで宙に舞う羽毛をそっと包み取るように、静かに少女は手を合わせる。

少し作法が違うが、まるで神に祈る様に。

もつとも、少女は神に祈った事など一度もないが。

「ああ、そうそうシオン、それでシノブはそれからどうしているのかしら? 宿に戻るのならば、身を軽く清めてからもう一度シノブと話しておきたいのだけれど」

「さて、今の所まだ通達は……というか、鳩も放したばかりだし……おや?」

連絡に使っている伝書鳩が飛んで来ていないか窓から外を確認し、

その後なんとなく下を見下ろしたシオンは、意外そうに声を上げ、

「こつちに來てるよ、彼女」

「……………なんですって?」

ずっと御機嫌だった少女が、初めて不機嫌そうに眉をひそめた。

「商業特区なんて、少々値の張る交易品の他は倉庫と商人達の特別住居しかないのに……」

対してシオンは、興味深いと目を細めて薄く笑っていた。

まだ離れているがそれでも一目で分かる黒衣の女は、『隻腕』の姉と共にこちらに向かってきている。

「まさかとは思うが、何か掴んだのかな？」

もしそうならば、なるほど少女の言うとおり油断できない存在だ。やはり、この少女の人を見る目はずば抜けている。

そう褒めようとしてシオンは振り向き、そしてまた苦笑する。

「何頬を膨らませているんだい？」

「だって、せっかくこつちにまで来てくれているのに身を清める時間がないんだもの」

あの役立たず共の会議を耳にしていた時以上に不機嫌なその様子に、シオンは思わず吹いてしまう。

それをみて、少女はますます不機嫌になる。

「あーあ、こんなことなら、もつと物を選べばよかったわ。車椅子はもう一台あるからいいけど」

そう言つて少女は、車椅子を少し下げる。

キィ……と、車輪が軋む音のすぐ後に、ガタンつと何かにぶつかる音がする。

「あら、踏んじやったわ」

視線を下に向ける少女の目に映るのは、車輪の下敷きになっている人の手。

それを車輪から外そうとして、もう一度強く車椅子を操る。

もう一度、ガタンつという音がして車椅子は手の向こう側に軽く落ちる。だが、手を引かれた当人の声はしない。

「無駄な時間を使わされたのだから、せめて楽しめるようにしようつて言ったのは君じゃないか……」

シオンが、車椅子を押してやろうと一歩踏み出す。

響いたのは床を叩く靴音ではなく、水たまりに足を入れた音。

辺り一面が、血に染まっていた。

辺り一面に、この部屋の常連のほとんどが転がっていた。

誰もが苦悶の表情を浮かべ、誰もが身体はどこかを掻き篋り、誰もが鼻や口から血をまきちらし——誰もがそのまま息絶えていた。

身体も、床も——この部屋を、紅く染め上げて。

「はあ……。臭い、落とさなきゃ。シオン、押して」
「はいはい」



「レーゼ」
「ああ……」

当初の目的だった將軍から話を聞くという事が不可能になったため、適当に陣地の様子を見た後、俺たちは商業特区へと向かっていた。互いに違和感を覚えながら。

「……柔らかかったな、土」
俺が、そしてレーゼが感じた違和感は、地面に敷きつめられたレンガだ。

繋ぎはなく、おそらくビツチリ並べた後に軽く叩いたのだろう。そしてそういう地面はある程度使いこまれた建物ならば、大体ある程度は固定されている物だが……

「あの倉庫は簡易駐屯地を設立した時に、真っ先に建てられた物だと聞いている」

「入った事は？」

「入隊した時に一度、数日前の大森林周辺の定期巡回の時の装備の補充でもう一度、その時には特に違和感はなかった」

「……あれ、多分なにか掘り返したんだよね？」

「……恐らく」

あの女兵士は特に何も言わず、だが怪訝な顔で俺たちを見ていたから気にならなかったのだろう。

「にしても、よく気がついたなシノブ」

「色々あつて霧の濃い森の中とか、日光ほぼゼロの森の中歩いたりとかしていたからな。足元は敏感になつてるんだ」

「ああ……分かる」

なるほど。の一言くらいで終わるかと思つていたが、思いのほかレーゼはやけに実感のこもつた肯定の言葉を口にしながら頷いていた。

「似たような経験が？」

おもわず、口に出していた。

「ずっと一人で旅をしていたからな。泥を踏んだ時の感触の差異に気が付かないと底なし沼にはまったりして……こう、な……掴む物がなかったら今頃ここにはいなかった」

「分かる。すごく分かる」

ああ、コイツ本当に俺と似たような経験してやがる。

自分も、こつちにきてからの最初の一年は地形が最大の敵だった。

「しかし……なぜ倉庫の床を掘り返した？」

「そもそもいつから、何を埋めていたのか」

「歩きまわりながら感触確かめたけど、結構広かつたぞ」

「ああ……レンガの間に挟まつている土の様子からもそれは分かつた」

「となると、あそこを掘つたのは最近か」

正直、あの宿の一階で飲みながら話していた時は脳筋勢の一人と思つていたが、かなり観察力の高い人間の様だ。

まあ、今の話を聞く限り一人で旅をしていたようだし、その時に鍛えられたのだろう。

観察して、食糧や水場、そして危険の気配を感じ取れなければ本当に容易く死ぬのだ。

自分は現実側で知識を常に取り入れているからどうにかこうにかやっつけていけているが……。

「だが……なぜだ？ 何かを隠していたのか？」

レーゼは、心底納得がいけないという顔をしている。

「さて、な。それならもつと上手い隠し方もあった気がするんだが……というか、長く埋めていたら痛むんじゃないか？ その、埋めていた物にも寄るが」

「ふむ……」

考え込むレーゼの姿は、どこか様さまになっている。

かなり身勝手な意見だが、酒を飲んでどうにか笑い飛ばそうとしている時よりも好感を覚える。

「御禁制の品？ 例えば葉や密造酒……」

「そこまで酒類の取り締まりが厳しくないここで密造酒がそこまで金になるとは思えんし。葉の類は……」

「そうだな。駄目になる可能性も十分ある。そんな物を埋めるわけがないか」

商業特区には、まばらにしか人がいない。

俺はてつきり市場をもつと凄くした場所だと思っていたのだが、自分でも分かるものは交易品の類の店と、ちよつとした飯屋だけ。後はお偉い商人の家や、あるいは一部の加工品……例えば板や革や布、紙、紐等の製造工場がいくつかある程度だ。

「立派に壁で囲まれているんだ。テントと違って灯りも漏れないし、外から見えない事するには悪くないが……」

「ふむ……つと」

ふと、濡れた煉瓦レンガの臭いに慣れてきた鼻が違う臭いを感知する。

程良く焼ける、肉と香草の香ばしい香りだ。

「……腹、減ったな」

「せっかくだ、何か腹に詰めておくか」

臭いの元はすぐに分かる。ちよつと通り過ぎようとしていた飯屋だ。

もう昼はとつくに過ぎているのだが、恐らくちよつとした軽食を出すのだろう。

ちつぽけな飯屋の表の、とても小さな小屋——というか屋台での後ろでは、コンビニのおでんのように仕切りがいくつもある鍋に野菜や肉が煮込まれ、その隣では店の人間が吊るされた燻製肉を外して削り

始めている。

なんとなく、その様子をボーッと見ているレーゼが、唐突にあつと声を出した。

「おい、シノブ」

「なんだ？」

「お前、狩りは得意か？」

「まあまあ、かな。スレイからは投石の腕前は褒められたし、実際それで鳥とか小型の獣を捕まえてるから」

「なら、罨を使う事はそんなに？」

「あー、寝る前に周辺にちよくちよく張ってはいるけど得意ってほどじゃ——あ」

俺も、レーゼの言いたい事に気が付いた。

「——そうか、臭い消しか……っ」

真新しい金属の臭いというのは、ある程度距離が離れているのならば分からないだろうが、間近ならばすぐに分かるくらい独特の臭いがある。嗅覚の鋭い獣なら確実に分かるだろう。

そのため、農村などで使うベアトラップ^{トラ}や、針金など、罨やそれに使う金属類は必ず一度は2、3日は土に埋めてその臭いを消すのだ。

「しかし……集団で行動する軍で臭い消しが必要か？」

「そもそも、そんな事をするのならば私に情報は入っているはず……ん、やはり違うか」

あまり自分に自信がないのか、すぐに自分の意見を下げようとするレーゼ。だが——

「……おい、とりあえず矢を作るのに適してる工房や、貯めておけそうな倉庫探ってみよう。嫌な感じがする所はさっさと潰しておいた方がいい」

妙に胸騒ぎがしていた。

この世界を訪れている時、度々胸の奥から湧きあがる危機感が——
全力で頭の中で大合唱を始め出した。

Black meets Red

倉庫というのは、中に仕舞っている物にも依るが、基本的には日光が余り当たらない密閉された空間であるというのが普通だ。

時間や場所にもよるが、昼間ですらかなり暗い事だつて珍しくない。かといって灯り——火を使えば思わぬ火事等が起こるかもしれない。

よつて、こういう所の調査に夜目は必須技能なのだ。

——俺たちみたいに。

「状況を整理しよう」

暗い倉庫の中を、俺とレーゼはこっそり侵入し片っぱしから調べている。

「元々は独自の国……というか自治体の集まりだったここに、お前達の国が侵攻したのが始まり。そうだな？」

「そうだ。10年程前になるだろうか……、この地のクロイツ、そして戦に備えての労働力を欲しての侵攻だったと聞いている」

レーゼも闇には慣れていようだ。俺と同じように一人で旅をしていたため、そういう部分も鍛えられたのだろう。ぎつしりと並んでいる樽の中身を素早く確認している。

目当ては矢の材料になりそうな物や馬への飼料などだ。

「後ろに対して備えておきたかったというのもあった。その後、周辺国との戦争に突入。小国をいくつも取り込み、今の勢力図となった」

「ああ、統一戦争だ」

「その中で、西部だけがなぜこும்原住民との摩擦が？」

「簡単に言えば、奴隷として扱われた事が大きいだろう」

今の所は酒や塩、酢等が主だ。食糧倉庫か。

妙に重い樽を見つけても、それは酢漬けや塩漬けだ。

「農耕地の開拓、水路の急な開発、それに海での漁業、装備の作製……使いつぶさんばかりに酷使していたと聞いている。罪を犯して送り込まれた開拓民もだ」

「なるほど、それで……」

自分はそのままで詳しい話は聞かされていない。

この国に住む人間ならば当たり前前の事——と言う訳でもないだろう。

恐らく、あまりこの地の醜聞を耳に入れるべきではないと判断されたか。

「で、戦争が終わった後も住民蜂起寸前の状態が続いて、それを治めるために今の領主様が派遣されてきた」

「実際上手くいっていたようだ。少なくとも、兵士に石を投げつける者はいなくなつたと」

今侵入している倉庫は非常に大きな倉庫。——ひよつとしたら、複数の商家による共同倉庫なのかもしれない。

外から見た様子と、壁の感じからしていくつかの区画に分かれているようだし、次の区画に移動した方がいいだろう。

手でそう指し示すと、レーゼは頷いてそれらしい方向を指で指し示す。

「それが突然不穏になった。原因はなんだ、シノブ」

「……正確にこれがこうなつてというのはさすがに分らないが、時期が重なる物には心当たりがある」

「時期？」

先導するレーゼの疑問の声、俺は先日から見せられている書類の内容を思い浮かべる。

「昔ここで力を持っていた前任者たちが舞い戻って来てからだ」



「キュベレ、リストアップした連中の姿が消えたというのは本当かしら？」

「はい、潜入させていた者達に今搜索させていますが……」

「そう……。分かっていと思うけど、最優先よ。手段は問わない」「はっ！」

一礼し、キュベレが部屋を去るのを見届け、部屋の主——いや、この西部の主、リディアⅡハウゼンは大きくため息を吐いた。

その目の前の机には、先ほど自身が口にしたリストと言う名の羊皮紙が散らばっている。

書かれているのは、少し前までこの西部において力を持っていた者——あるいはその後援者達である。

つまり、リディアⅡハウゼンが思う最有力容疑者リストだ。

「この者達が一斉に姿を消した……」

前領主は南部に異動させられ、その側近達も同じくだ。

いわゆる悪徳貴族ではなかった。むしろ善人に入る心優しい女性だったが、だからこそ強欲な者たちを抑える力を持ち合わせていなかった。

成果を上げる事の出来なかった彼女を、中央の貴族は無能と罵った。

確かに、ともリディアは肯定出来た。同時に、彼女の才能が活きる場ではなかった事も理解できた。

そうして彼女を弁護したから、リディアはこの西部に来る事になったと言える。

そして、そんな彼女を利用したのがここに名を挙げられている者たちだ。

旧警備部隊隊長、銀行や商店の元締め、大地主など……。

自分と違い側近の少ない前領主の周りを固め、良いように利用していた者。

自分がこの地を任せられた際に、そういった者は排除したのだが……。

彼女らの富への執着は凄まじい物だった。

そして、一度富を奪った自分への恨みと執着も。

(……中央に、あの者らを手引きする者がいる)

邪魔な勢力を排除する際にはなるだけ穏便な手をとって退場いた
だいた。

彼女達をただ殺してもそれはそれで混乱の元になり、国に回収され
る金や土地はともかく、宙ぶらりんになった役職や役目、立場などの
利権をめぐるそれ以上の血が流れるのを恐れたからだ。

それを、逆手に取ったものがある。

(なるだけ敵は作らないように泳いできたつもりだったけど……やは
り、限界だったようね)

排除した連中を、正式な手段——王命という形でこちらに送り込ま
れた。それも、独自権限を持たせた上で。

なんとか証拠を掴んで、大事になるまえに芽を詰み取る算段が——
よほどの策士を引き入れたのか痕跡が掴めず、逆に賊騒ぎなどで引つ
かき回されている。

「今頃、どこかでニヤニヤ笑っているのでしょうか……」

あの欲ボケ女共は怖くない。

リディアⅡハウゼンの敵は二つ。

中央にいる何者かと、そして今この地にいるだろう策士だけだ。

手元の小さなハンドベルを振る。すぐさま付き人が「お呼びでしよ
うか？」と室内に入る。

「ベルヌーイ……は、いないのよね。……スレイを呼んでちょうだい」



「なら、さつきとソイツらを事故に見せかけて殺せばいいではないか」
「お前物騒だね。いや俺も同じ答えに辿りついたんだけどさ」

目的はそれらしい物品。そして今度はその荷物がどこから来たものかを遡る事だ。

次々に、音を出るだけ立てないように物品を調べながら、互いに状況を整理している。

「多分だけど、政治的な動きで色々あるんだろうさ……まあ、そもそも王命で来たって位だから、それを後押しした誰かを突き止めないと動くに動けないんだろうさ」

「ふむ、そういうものか」

「……つてか、王命だろう？ 王様の命令だろう？ それで来た相手を軽々殺しちまつていいのかよ」

「構わんさ。起こるのは事故死だろう？」

「おい、騎士様志望」

それにしてもこの女、おそらく今が地なのだろうが中々に良い性格をしている。

「いや、真面目だぞ？ 暗殺は良くある事だからな」

「……そんなに？」

「ああ。統一戦争直後から延々……ハウゼン卿を見ろ。自前の親衛隊を持ってきているだろう？ 維持にかかるコストも馬鹿にならないというのに」

「普通じゃなかったのか」

「異動などあり得ない中央の貴族ならそうでもないのだがな」

「ハウゼン卿は違う、と」

「ああ。先代までは中央の貴族だったが統一戦争末期——ようするに、戦争の終わりが見えだしてからの政争に巻き込まれて、な」

「……暗殺された？」

先ほどの話の流れから、そうなのかと尋ねる。

レーゼは首を横に振り、

「いや、領地を取り上げられた。濡れ衣でな……」

「それで、こう言う……その、なんて言えればいいのか……流れの領主に？」

「面白い表現だな」

棚に詰まった箱の蓋を外しながら、小さくレーゼは笑ってそう返す。

「珍しくはない。というか、領主は普通そうだ。働きが認められれば長くその地を治める事もあるそうだが……基本的に三、四年で違う領に封じられる」

「……どこかに根を張って、力を付け過ぎるのを防ぐためか」

「だろうな。だから貴族は皆、移動が少なく贅沢しやすい中央に付けるように力を尽くす。政……それに、賄賂や流言、暗殺といった手段をな」

「なるほど……」

思った以上に国としては殺伐としているようだ。

「この西部に旨みは？」

「政治的な、か？ そこまでの知識は私にはないな」

「思いつく事もか？」

「むう、そうだな……」

レーゼは、埃などでベトつき始めた手を、先ほどの雨で少し湿らせた布で拭う。

「領地の広さ、か」

「広いのか？」

「ああ、これが他の……例えば南部等なら少なくとも十は……ひよつとしたらもつとか、それくらいの領地が入るだけの土地だ」

恐らく黒ずんでいるのだろう布を気にせず腰のポーチに突っ込む姿は、綺麗好きのスレイとは全く重ならない。

別に不快だとかではない。どちらかと言うと、共感だ。

手際の良さや眼の付け方等が、自分と同じような苦勞をしていた事を伝えてくる。

「なるほど……。なるほどなるほど……。んじゃあ入ってくる金とか作物の税も結構多い、と」

「ああ……。だがここには他国と面している北部や東部と違い与えられる予算が少ない。それに、任せられる国軍の兵もな」

「国の兵士だと地元の反発が大きいからか？」

「ああ」

そして知識面も、やはりスレイと同じ家の貴族だ。やはりそちら側の世界をそれなりに知っている。

「ここを本気で治めるとなると自前で兵力を雇わなくてはならんから、出費がかなり大きい。そこらを見捨てる連中ならば……まあ、稼げない事もないだろうが……」

「領主としての旨みは少ない、か」

こうなると、旨みのありそうな人間はやはり限られてくる。

中途半端にこの地に権限を持っている奴ら、この間俺とスレイでリストアップした連中ではぼ間違いないだろう。

（そういう連中が手を組んでるんなら、目的の第一段階を達成したあたりで勝手に仲たがいでくれそうだけど……）

それはつまり、連中がかつてと同じ位稼げる立場に付くか、かつて自分達を追い払った現領主を追いだすかだろう。

正直べつにどうでもいいのだが、そうならなかったで下手したら西部を出るのにもまたひと悶着ありそうで……面倒くさい。ひたすら面倒くさい。

（やっぱりさつさとこれにケリを付けよう）

こちら側の世界の過酷さに、一日とはいえ絶対の孤独感に負けて流されてしまったが……これほどの陰謀に関わるとは思ってもみなかった。

さつさと首謀者連中とつ捕まえるか首たたつ斬って、スレイや領主様の所に差し出そう。

「だめだな、こつちもそれらしいものは無い。レーゼ」

「ああ……隣のブロックに移ろう」

相も変わらず見つかるのは商売用の保存食や香辛料、それに紐や縄、毛皮といった物ばかりだ

もし横流ししている物品があるとすれば、それはかなりの量になるはずだ。

となれば、一か所を延々探すよりもなるだけ多くの場所を当たった方が効率的だろう。

レーゼも同意見だったのかすぐさま同意し、繋がっている隣のブロックのドアへと足を進める。

俺も後に続き――

「……なんだ、この臭い……」

俺もその後が続くが、ドアの隙間からすでに強い香りが漏れている。

「ルイボステイヤー？」

「？　なんだそれは？」

「あく、俺がいた所が余所から仕入れていたハーブティード」

「ハーブ……香草か。なるほど」

現実の世界で健康という言葉に弱い母が、高血圧の父親のために毎朝毎晩淹れている香りだ。正確にはあの独特の香りに、少し甘い香りが混じっている。

同じく鼻が効くのだろうレーゼは眉を顰めている。

自分にとっては慣れ親しんだ香りに近いからそうでもないが、レーゼにとっては異物感が強いのだろう。

しかめっ面のままレーゼは、音を立てないようにそつとドアを開いた。

「こりゃあ、またギツシリだな……」

ここまで見て回ったどのブロックよりも、樽や箱がギツシリ詰まっている。

一番手前の樽に近づいたレーゼが、その場にしゃがみ込む。

「臭いがするのは、これか」

そつと床に触れたレーゼは、その手に何かを付着させている。

なんとというか、バラバラに摘んだクローバーの葉のような物を乾燥させた様な物だ。

「……中身を零したのか？」

おそらくこれらが入っていたのだろう樽の蓋を開けてみると、やはり強烈な香りが立ち込める。

一度開けたのだろう。少し緩んでいたため開け易かった蓋を傍に置き、中を確認する。

床に散らばっているのと同じ乾燥させた葉が、樽の半分ほどの高さまでぎっしり詰まっている。

鼻を袖の布で押さえながら、レーゼも中身を覗き込む。

「……………」

「どうした?」

「いや、妙だ」

俺が置いてあった蓋を取って再び封をし、他の樽に手を置く。

「私も初めて目にする物だから用途は分からんが、お前が言っていたようにこれがハーブの類ならばぎっしり詰めるか、あるいは中に落とし蓋がしてあるはずだ。このままだと運ぶ度に中身が揺れるし、外気に触れて香りをダメにしやすい」

「……………」

「まただ。」

先ほどレーゼと駐屯地の倉庫に埋めていた物を推理し合ってた時に感じた嫌な予感が、また一層強くなった。

「そう、先ほどの……………」

——そうか、臭い消しか……………」

先ほどの会話が蘇る。

「レーゼ、この商業区に入ってくる荷は、商人専用の別口から入ってくるんだっただな?」

「ああ、なにせ馬車の荷車などで大量に物を持ってくるからな。手荷物物の軽い旅人等と違い調べる物が大量にある。そのための別口だ」

「検査内容は?」

「ん？　いくつかの窓口に分けて中身を確認、それと犬だな」
「犬」

「ああ、御禁制の品の臭いを覚え込ませた犬数匹で……」

レーゼが言葉を切り、樽を見つめる。

そこまでいけば気が付いたようだ。

「しかし……馬鹿な。こんな臭いの強い物……」

「俺は知らんが、その犬、特定の臭いを覚え込ませているんじゃないか？　それ以外の臭いで上書きされた場合はどうなる？」

「……分かん。だが……」

レーゼは次々に樽の蓋を開けていく。

自分も触った時に気がついたが、どれもこれも松脂のようなもので封されていた痕跡がある。

それが易々と開くと言う事は、どれもこれも封を開けたのだろう。

中途半端に、中身の香草を残したまま。

樽ではなく、木箱の方へと目を向ける。

「……この焼印」

見覚えがある。

先ほど立ち寄った駐屯地、そこに積まれていた木箱と同じだ。

「よい……っしょ……っ」

ずいぶん重い。こちらはどうかやら中身が入っているようだ。

少し汗をかきながら少し引き摺りだし、蓋を開ける。

「……ダガー、小手、蹄鉄型の隠しナイフ、それに……」

やはりというかなんというか、藁のクッションに包まれていたのは
武器の一式だ。

ただし、いやに近接戦闘に特化したモノばかりでとても行軍する軍
で使われるような物ではない。

そつと、その中で唯一武器の類ではない妙な小瓶の集まりに手を伸
ばす。

そのうちの一本を手に取り、栓のコルクを外す。

それに鼻を近づけようとし——手を止める。

「……血止めの類かと思ったけど……」

足元に零れたままの香草。それが目当てなのか、トカゲの様な生き物が近寄ってきている。

そつとその身体に向けて小瓶を傾け、直接滴を垂らす。

瞬きする時間に等しい僅かな間に、零れた滴はピチツという音と共にその生き物の体に当たり——そしてトカゲもどきは一瞬だけビクンツ！ と痙攣しただけで、うめき声も上げずにひっくり返った。

「毒、か」

もはや息をしていないトカゲをそつとブーツのつま先で手近な物影に隠し、同時に小瓶をポーチの中に滑り込ませる。

木箱の焼印は覚えた。もちろん偽装の可能性はあるが手掛かりとしては十分だ。

ここから抜け出し、その焼印で登録されている商人を当たれば何か掴めるかもしれない。

「レーゼ、いくぞ。長居は危険だ」

そう声をかける。が、返事がない。

これまでならば即座に声か行動が帰って来ていたが、今は静かなままだ。

不審に思っただけ振りかえると、レーゼは静かに構えていた。

剣を抜いてはいない。が、いつでも抜き放てるように柄に手を当てて俺を——いや、俺の向こう側を凝視している。

「誰だ？」

レーゼが問いを口にしたのと同じタイミングで、俺も剣を抜く。

慣れた乾木の鞘ではなく、真新しい革の鞘から新調した剣を。

「出てこい……っ」

俺が構え終わったのと同じ位に、レーゼが鋭く言い放つ。

そして、向こう側から足音がする。

コツン、コツンと。

わざと聞かせるように。

『……あの方が気にかける女がどの程度のものかと思っていたが……』

布で口を押さえたまま喋っているような——いや、そのものの声が

響く。

同時にカツン、カツンと足音が増える。増えていく。

(……3、4……最初の足音の奴と合わせて6人か)

わざとらしく音を立てている最初の奴とちがい、残りは普通の足音だ。判別は容易い。

『なるほど、少なくとも勘働きは良いようだ』

そして、その女が姿を現す。

赤い。

女をみた第一印象がそれだ。

自分のようなフード付きの真っ赤な外套を羽織っている、やや小柄な女が闇の中に浮かび上がる。

その後ろから、装備がバラバラな5人の兵士が。

「……貴様」

レーゼが、その後ろの兵士の一人に向けて口を開く。

「正直、お前が駐屯地に戻って来た時点で嫌な予感はしてたさ。テレーゼ」

駐屯地に一人残っていた、あの兵士だ。

「……一応、念のために言っておくが」

一步、前に出ながら口を開く。

蛮勇ではない。

今現在唯一の逃げ口である、俺たちが入って来たドアに近づくためだ。

「俺たち、泥棒とかじゃあないぜ？」

『ああ、知っていると』

赤い女が、大きな衣擦れの音を立てて外套を翻す。

そして腰から獲物を抜く。

左右それぞれの手に握られているのは、かなり短く、細い二本の短槍。

『だが関係ない。大人しくしてくれれば少しの間牢屋に入れる以上は何もしないが……』

顔は良く見えない。

だが、これ以上なく印象的な女だ。
何せ、フードの中の瞳が真つ赤に輝いている。

『どうだ?』

遅れて兵士達が、それぞれ獲物を引き抜く。

数の差は向こうが有利。

訓練された兵士に、それ以上と思わしき将らしき女。

不利だ。とてつもなく不利だ。

おもわずレーゼと顔を見合わせる。

レーゼは俺の顔を見て、一瞬首をかしげ、そして次に肩をすくめる。

『……決まったかね?』

「ああ——」

「——イヤだね!!!!!!」

逃走

「誰だったんだ？ さっきの赤いフードを被った女」

「さあ？ 許可腕章を付けてたし、割符わりふも持っていたからどこかの商人の関係者だとは思いますが……」

腰に小剣を差し、手に槍を持った二人の女性は、とある大倉庫の入り口を固めている。

彼女達の仕事は、そこそこの値が付くだろう売り物が多く置かれているこの倉庫を守ることだ。

内部にも見回りをしている仲間が多くいる。

「そういえば、最近この倉庫妙に出入りが多いですよねえ……」

「ああ、馬車も人も貨物も出入りが多くて……おかげで埃っぽくて仕方ない」

「今日の勤務終わったらサウナ行きましようよ。今日なら近場の屋台も開いてますし、汗流した後ちよつとした串や煮しめをおつまみにパーツとお」

「そうだな、悪くない。……たまにはサウナじゃなくて風呂で湯船に浸かりたいが」

当然女性達は兵士。ただし、ハウゼン卿の指揮下ではない。この地を拠点にしている商人が雇った傭兵である。

「海の方じゃあ、温かい湯が湧き出る洞窟があるらしいですねえ」

「身体にいいらしいが、結構な金を取られるという話だぞ」

「うわあ……。やっぱり世の中お金なんですねえ」

領主への忠誠心はもちろん、雇い主である商人に対してもそんなものは持ち合わせていない。

この二人が心から信じるのは金。

「あれですね。美味しい物食べて好きなだけお風呂に入れて好きなだけ寝るだけの仕事とか転がってませんかねえ」

「ああ……。人の夢だよな……」

心から欲しているのは、自堕落な生活だった。

「商人付きの護衛なら結構お金もらえるとと思ってたんですけどねえ」

「仕事を探す時は、まず雇い主をしつかり見るべきだった」

「教訓を得ただけでしたねえ」

「そうだな……」

その時、倉庫の中で『バフンツ!』という音がした。

二人揃って振り返るが、すぐに顔が元の位置に戻る。

「中の人ですねえ」

「粉物の袋でも落としたか」

「あれ商人の人すつごく怒るんですよねえ。『いったいいくらになる
と思っっているんだ?!』って」

「……やったのか?」

「10日ほど前に一度お」

「そうか、気をつけるよ? ペアを組んでる私の給金まで減らされか
ねん」

そんな時、再び中から音がした。

今度は『ガシヤンガシヤンツ!!』と重い金属が地面に叩きつけられ
るような音がする。

二人の兵士は再び振り向き、またすぐに顔を二元に戻す。

「今日の内部見回りはどこの班だ」

「アーシエさんの所じゃないかとお……人が増えたから中を教えると
か言っていましたし……」

「新入りだったか? 確か、ハーレイとかいう武器商に雇われている」

「それじゃあ、向こうの御主人の命令で急な荷降ろしとかあったんで
すかねえ」

「ああ、なるほど。ありそうだな」

その後もガチャンガチャンガキーンと金属音がしているが、それ
は気を止めず二人は会話を続ける。

「かなり大量に品をさばくのか」

「いいなあ。きつと商人さんは大儲けですねえ……」

「それでアーシエとやらの給金が増えるかどうかは別だがな」

「夢がない話ですねえ」

「ああ、ないな。所詮どこまでいっても傭兵は傭兵だ」

今は勤務中だが、あまりのやるせなさに思わず煙草が吸いたくなくて、少し目つきの鋭い方の女が腰元を少し探る。

その時、後ろから今度は人が走ってくる音がした。

「ん、なんだ？」

「交代には早すぎるお時間で——」

「そこをどけえええええ—————っ
!!!!!!」

「うおおああああっ!?!?!」

「きゃああああああっ!!!!」

そして二人仲良く、中から飛び出してきた黒ずくめと軽装の人物に蹴り飛ばされ、地面と接吻する羽目になった。



「お前、目くらましなんてよく持っていたな！」

「たまに使うんだよ！ ヤバそうな獣に追っかけられている時とか！」

香辛料の様な強烈な刺激臭のする草などを調査した自作品だ。おかげで効力はバラバラだが、それでもいつも最低5袋は常備している。

そのうちの3つを叩き付け、どうにか囲みを突破。

光を頼りに出口を探しながら襲ってくる兵士をこかしたり斬ったりして突き進み、そして今、入口にいた二人の兵士を蹴り飛ばし、街中を一気に駆け抜けている所だ。

「おい！ いったいどうなっているんだ!？」

「知らん！ だけど、あの箱の中身はどう見ても暗殺道具だった!」

「——城か!？」

「多分！ それか門の防衛施設!!」

ホントコイツ、スレイとは違う方向で頭が回るといふか察しがない。

おかげで説明も最低限で済む。

「臭い消しは武器を隠し持ったまま城内に入り込むためだろう。あの城の中は、警備に特化した人間を配備している。臭い一つでも、気付かれるかどうかはともかく違和感を感じる人間は出る！ だから——!」

「その可能性をちよつとでも減らしてつて訳か。でも量が尋常じゃなかったぞ!？」

商業特区はある意味で商人の街であつて、デイエナの街とは切り離されている。

一応搬入様の通路はあるが、そこは堀にかかった橋と兵士達によつて、検問所以上に堅固に守られているためルートから排除。

誰が敵なのか分からないのだ。そうになると、ここから城に向かうには検閲所を越えて一度外に出なければならぬ。

「数が必要となると単純な暗殺ではない！ 邪魔な者だけを即座に、静かに同時期に殺すための装備と見るべきだろう!」

「じゃあ目的は少数での制圧か……くそつ、面倒な!」

耳を澄ませるが、後ろからの足音はしない。

スレイと会う前、あの刀を拾う前に作つておいた目くらましだが、効力はそこまでじゃない。

すぐに来ると思つていたんだが——特にあの赤い奴。

「レーゼ、検問所の兵士はどうする!？」

とにかく、早く城に知らせないと不味い。

それには後ろの追手に追いつかれないうちにさっさとここを突破しなけりやならない。

見えてきた検問所の姿にホツとしつつも、同時に舌打ちをしたい気

分になる。

アソコにはそこそこ武装を整えた兵士がそれなりにいた。

というか、目に前にもう抜剣してる兵士が数名いる。

(気が早いにも程があるー！ さっきの奴らの仲間か！)

横に眼をやる。レーゼは、一度は鞘に仕舞った刃を再び日の光の下に晒し、

「押し通る!!」

「乗った!!」



「あら。あらあら。シノブったらやるわねえ……ニキを振り切るなんて」

「いや、元々君が追い返すだけでいいと指令を送っていただろう」

「でも、殺される可能性も十分あったじゃない？」

「……いやはや、まったく。君の好意というのは随分と屈折しているね」

慌ただしく身を清めたため、まだ湿っている少女の髪を布で包んで水気を取りながら、シオンは曖昧な笑みを浮かべる。

その少女は、先ほどとは違うがある程度高いどこかの部屋の窓から遠眼鏡で下の様子を覗いている。

「ああ、でもやっぱりシノブの問題は服ね。顔を隠したいのなら隠したいで、もつといい衣服も見繕ってあげなくては」

「君は彼女と戦いたいのかい？ それとも飼いたいのかい？」

「さあ？ 分からないわ」

「……なんとも、君らしい解答だ」

取っ手付きの遠眼鏡を、眼球に押し付けるかのようにしている少女

は無邪気に、そして不気味な笑みを浮かべている。

「ねえ、シオン。あの二人、城に乗り込むかしら？」

「そうさせないために先ほど手を打ったじゃないか」

「その上で聞いているのよ」

恐らくニキが——あの紅を好む槍使いが事前に手配していたのだろう兵士5名。

だが、あの二人の相手にはならない。全くなれていない。

銀髪の剣士テレーゼが相手の剣を受け止めた瞬間、テレーゼの後ろから飛び出たシノブの手から放たれたスリングによる石の一撃により、もんどりうって倒れ込む。まずは一人。

今度は兵士二人がかりでシノブ一人を同時に攻撃しようとするが、すぐさま一人はテレーゼによって討たれる。

もう一人はシノブの鞆によって剣筋を止められ、次の一撃を繰り出そうと剣を引いた瞬間、がら空きになった顔——正確には顎をシノブによって蹴りあげられ、体勢が崩れてがら空きの胴を斬り裂かれる。

一瞬で三人がやられ、残る二人が一瞬戸惑いを見せた時には、二人ともすでにその間合いの内側に入り込んでいる。

一閃。

テレーゼ、そしてシノブ。

片や士官学校にて剣の申し子と言われた女。

片や、何もかもが不明だが一人旅で鍛えてきただろう剣。

そのどちらの剣筋も、躊躇ってしまった兵士では止められない。

(……鮮やかだ)

見惚れるような鋭い剣筋のテレーゼ。対して剣と鞆を、刃物というよりまるで鈍器を振るうように扱うシノブの荒々しい立ち回りは、組み合わさる事でまるで絵画の様な美しさを持っていた。

「来る。恐らく」

「本当？」

少女は遠眼鏡を膝の上に置いて、眼をキラキラ輝かせてシオンの方を振り向く。

「ああ、本当さ。だからじっとしていてくれ、綺麗な髪が傷むぞ」

「はいい♪」

少女はそういうとまた前を向いて、検問所を抜けようとしていく二人を遠眼鏡で眺めている。

「ああ、そうそうシオン」

「なにかな？」

「二人に追撃部隊を出しておいて」

「いいのかい？」

「いいのよ」

「……ふむ」

二人は検問所を越え、この街を囲む堀にかかっている跳ね橋を駆け抜け外へと。

それを見届けて、シオンはマントの下に隠していた小さな袋から手鏡を取り出し、太陽の光を当てる。

するとまもなく、離れた建物——正確には警備隊の待機所から、馬に騎乗した兵士が素早く小さな隊列を組んで検問所へと向かっていく。

距離があるとはいえ馬と人の足の差は大きい。外に逃げようがすぐに追いつかれるだろう。

「いやはや、本当に——」

「なに？」

「君の好意は屈折しているね」

「当たり前じゃない」

商業特区とティエナの街を繋ぐ橋から、それと街の遠くの方から地響きのような音がする。

その音を耳にして、少女は満足そうに笑みを浮かべる。

「ただただ真っ直ぐな好意なんて、この世のどこを探しても存在しないし……そもそもそんなのつまらないわ」

二人を追っていった騎兵が見えなくなる。遠眼鏡を使う少女には見えているのだろうか。

そして、それと同じタイミングで作業が始まる。

この街を、文字通り孤島にするための作業が。

ここから離れている各方面の城門付近では、今頃計画されていた制圧作戦が始まっているだろう。

追撃隊が抜けた後の検問所でも、そしてこの城塞都市ディエナの象徴たる、あの城でも。

「……なるほど。確かに、その通りだな」

——好意ほどやっかいで、複雑で、面倒な感情はない。



「クソッ！ これは何の音だっ!?!」

後ろを振り向けば確認できることだが、今はそんな余裕すらない。ただ真っ直ぐ、少しのタイムロスももつたいたない。なんせ後ろから、微かにだが蹄の音が近づいてきている。騎兵の追手だ。

「おそろく橋を上げた音だ!」

「籠城か……っ」

書面とちよつとした買い物でしか街を知らない俺と違い、兵士としてある程度を把握しているレーゼがいてくれるおかげで状況の把握が容易くてありがたい。

——が、それで状況が好転するかという別の話なわけで……。

「となると他の門の橋もダメか……っ」

「だろうな。わざわざ商業区だけを封鎖する意味はない。それも私達が出た後に」

通常の経路は全て塞がれていると見て間違いない状況。

自分達だけで城に報告するなら、なんらかの方法で侵入しなければならぬという事……いや、

(城もあるいは制圧されたか?)

ディエナの街の出入り口だけが塞がれているとしても、それはそれで城が敵勢に囲まれているのとはほぼ同意だ。

確か城にはスレイと、彼女に与えられた兵士や領主の親衛隊がいるはずだが……。

「レーゼ！ 近場に確実な味方はいないのかっ!？」

「いない！」

念のための問いかけに、レーゼは予想通りの言葉を一言で返す。

そりやそうだ。なにせ、傭兵を管理していた將軍はどこかに行つて、その下にいた傭兵は黒確定なのだ。

信じるというのはとても無理。というか、恐らく――

(……とにかく、例の賊騒ぎの連中と同一犯なら村とか他の街でも騒ぎが起こっている可能性があるか!)

味方になり得るのは、西部以外にいる正規軍くらいしか思いつかない。

だが、助けを呼ぶには時間がかかりすぎる。

その間に、街の中の間人——もちろん城の間人もどうなるか……。

「レーゼ！」

「ああっ！」

「今手を打つには時間も余裕もなさすぎる！」

「何をするかだけ言え！」

「一度やり過ぎす!!」

どちらにせよ、追手をどうにかする必要がある。

橋を上げて籠城しているのならば、逆に言えばこれ以上追手が来る可能性は少ない。

まずは俺達がある程度自由にならなければどうしようもない。

「となると森かっ！」

俺の叫びに、レーゼはすぐさまそう切り返して来る。

ホントに理解が早くて助かる。

馬を振り切るにはそれしかないし、その他の追手を倒すには身を隠す所の多い森しかない。

(ホントに……ホントにもう……っ！)

このまま西部を抜ける選択肢もあるにはある。

ただし、それは同時にスレイを見捨てる事になる。

人にしよーもない面倒事を押し付けてしよーもない腕輪押し付けて人をデイエナに拘束した犯人だが——いちおう、恩がある。

切り抜けるしかない。

俺と、レーゼで……っ！

「クソがつ！　せめて俺がいない所で騒動起こしやがれってんだクソッタレ!!!」